569
14
別書誌
合2冊

569-14
1200501516638

岩波文庫
88

伯父ワーニャ

チェーホフ作
米川正夫譯

岩波書店

内閣文庫

岩波文庫
88

伯父ワーニャ

チエーホフ作
米川正夫譯

岩波書店

昭和・内閣・文庫

569~14

伯父ワーニャ

（田園生活より）

―戯曲四幕―

人物

アレクサンドル・ヴラヂーミロヴィッチ・**セレブリャコーフ**　退職大學教授。
エレーナ・アンドレーヴナ　その妻、二十七歳。
ソフィヤ・アレクサンドロヴナ（**ソーニャ**）　先妻の娘。
マリヤ・ワシーリエヴナ・ブイニーツカヤ　三等官未亡人、教授の先妻の母。
イワン・ペトローヴィッチ・**ブイニーツキイ**（伯父ワーニャ）　その息子。
ミハイル・リヴォーヴィッチ・**アーストロフ**　醫師。
イリヤー・イリイッチ・**チェレーギン**　破産した地主。
マリーナ　年とつた乳母。
下男

セレブリャコーフの田舍邸の出來事

第一幕

庭園。露臺のついた家の一部分が見える。並木道の古い白楊樹の下に、茶道具をならべた卓がある。そのそばには、いくつかのベンチと椅子、ベンチの一つには、ギターがおいてある。卓からほど遠からぬところに、靴鑢が釣つてある。

――午後二時すぎ。曇り。

乳母マリーナ、動きのすくない白髪の老婆、サモワールの傍に腰を掛けて靴下を編んでゐる。醫師アーストロフ、その傍を歩き廻つてゐる。

マリーナ　（コップに茶を注いで）召し上れ、旦那。

アーストロフ　（進まぬ樣子でコップをとる）なんだか欲しくないね。

マリーナ　では、火酒（ヴォートカ）なら召し上りませう？

アーストロフ　いや、わたしは毎日はやらないんだ。それにどうも息苦しい。（間）ねえ、ばあや、わたし達が知り合ひになつてから、一體どのくらゐになるかなあ？

マリーナ　（考へて）どのくらゐ？　えゝと、さうですねえ……あなたがこちらの方へおいでになつたのはと……さあ……あれはいつでしたつけねえ？……まだゼーラ・ペトローヴナが、ソ

ーネチカのお母さまが生きておゐでになつたつけ。なんでもあなたは、あの方がゐらつしやる時分、ふた冬わたし共へおいでになりましたよ……して見ると、十一年くらゐになるわけですねえ（考へて）でも事によると、もつとになるかも知れない……

アーストロフ　あの時分から見ると、わたしもずゐぶん變つたらうな？

マリーナ　そりやあもう隨分。あの頃はあなたもお若かつたし、おきれいでしたけれど、今ぢや大分おふけになりましたよ。もう昔とはお綺麗さが違ひますよ。それに何と言つても――ヲートカを召し上りますからねえ。

アーストロフ　うむ……十年の間にまるで別な人間になつたよ。そのはずさ。あんまり働き過ぎたからなあ、婆や。朝から晩までしよつちう立ちづめで、まるで休むことなんかありやしない。夜は毛布の下に小さくなつてさ、病人のとこへ引つぱられやしないかと思つて、びく〳〵してゐるんだよ。お前と知り合ひになつてからといふもの、一日として暇なことはありやしなかつたよ。だもの、どうして老けずにゐるものか。それに生活そのものが退屈で、くだらなくつて、穢らはしいと來てゐる……この生活がずる〳〵引き摺り込むんだ。おまけに、まはりにゐる奴がみんな變り者ばかりだ。一人のこらず、ご念のいつた變り者ばかりだ。かういふ連中と二三年も一緒に暮してみろ、知らん間に自分までだん〳〵變り者になつちまふよ。これはどうにも遁れる事の出來ない運命なんだ。（長い髭を捻りながら）どうだい、まあこの髭は、とてつもなく生えたものぢやないか……馬鹿な髭さ。わたしは變り者にはなつたがね、ばあや……馬鹿にだけはまだなつてゐないよ。おかげで腦味噌だけはちやんとしてゐる。しかし感情はどうやらなまくらになつたやうだ。わたしは何も欲しくない、何もいらない。誰も愛しなんかしない……たゞね、お前だけ愛してゐるんだ。（彼女の額に接吻する）わたしの小さい時に、丁度お前のやうな婆やがあつたよ。

マリーナ　あなた、なにか召し上りたかありませんか？

アーストロフ　いや、ほしくない。何でもね、大齋期の三週間めに、わたしは傳染病のはやつてゐるマリーツコエ村へ出かけた事がある……發疹チブスつて奴でね……どの家にもどの家にも病人がごろ〳〵してゐる始末だ……いやもう汚くつて、やけに臭くつて、煙りはもう〳〵してゐるし、床の上には仔牛が病人と一緒に臥てゐるし……おまけに豚の子までその邊をうろ〳〵してゐるんだ……わたしは一ぺんも働きづめで、ほんのちよつとも腰をおろす暇がないし、けし粒ほどの物も口に入れなかつたんだよ。ところが、家へ歸つたつて、やはり休ましてくれやしない――鐵道から轉轍手を一人かつぎ込んだのさ。わたしは手術をしようと思つて、その男を臺の上へのつけたところ、その男は、クロロホルムの痲睡にかゝつたなり、ころりと死んでしまつたぢやないか。するとね、こんな用もない時に感情が心の中で目をさまして、まるでわざとわたしがその男を殺しでもしたやうに、氣が咎めて仕方がないのだ……わたしは腰をかけて眼をつぶつて――こんな風にじつと考へた。我々が死んでから百年も二百年もたつた後で、この世に生活する人達は、

いま彼等のために道を開いてやつてゐる我々のことを、有難いと思つてくれるだらうかつてね。ばあや、そんなことなんか思つてくれやしないね！

マリーナ　人様は思つてくれなくても、その代り神様が思つて下さいますよ。

アーストロフ　いや、あり難い。お前はいゝ事を云つてくれた。

ヴイニーツキイ、家の中から登場。朝飯のあとで一寝入して、少しとり亂した樣子。ベンチに腰をおろし、洒落たネクタイを直す。

ヴイニーツキイ　さう……（間）さう……

アーストロフ　一寝入したのかい？

ヴイニーツキイ　あゝ……ぐつすり。（あくびをする）何しろ教授夫妻がこゝへ來てからこつち、生活がすつかり脫線してしまつた……とんでもない時に寢たり、朝飯や晝飯のときにカブールとか何とか云ふものを食べたり、酒をのんだり……萬事がどうも不衞生を極めてゐる！　以前は暇な時間なんぞこれつぽつちもなかつた。僕もソーニャもよく働いた――全く感心するくらゐね。ところが、今ぢや働くものはソーニャ一人きりで、僕は眠る、食ふ、飲む……實によくない！

マリーナ　（頭を振りながら）ほんとにだらしがない！　先生は十二時にお目ざめになりますが、サモワールは朝からぐら〳〵たぎり通しで、じつと先生のおいでを待つてるんでございますよ。あの方達がおいでにならない時分は、人並みにいつでも十二時すぎにはご飯を頂いたものだけれど、あの方達がおいでになつてからと云ふものは、六時ですよ。夜分は先生がご本をお讀みになつたり、書きものをしたりなさいますから、夜の二時なんていふ途方もない時間に、いきなり呼鈴がなるといふ騒ぎでせう……何でございます、旦那さま？　て申し上ると、お茶だ！　とかうですよ。それから女中たちをおこして、サモワールのお支度……ほんとに、だらしがないつたらありませんよ！

アーストロフ　それであの人達はまだ〳〵長くこゝにゐるのかね？

ヴイニーツキイ　（口笛を吹く）百年くらゐゐるさ。教授はこゝへ住ふことに決心したんだからね。

マリーナ　現に今だつてさうでございますよ。サモワールはもう二時間も、卓子の上にのつかつてゐるのに、皆さんは散歩にお出掛けなすつたんですよ。

ヴイニーツキイ　や、來てる、來てる……まあ、さう怒るなよ。

話し聲が聞える。セレブリャコーフ、エレーナ、ソーニャ、チェレーギン、散歩歸りのていで庭の奥から登場。

セレブリャコーフ　きれいだ、實にきれいだ……絵景だ。

チェレーギン　全く素晴らしいものでございます、閣下。

ソーニャ　あしたは山林の事務所へ參りませう、お父樣。ね、いゝでせう？

ヴイニーツキイ　皆さん、お茶ですよ！

セレブリャコーフ　君、すまないが、一つの書齋の方へお茶を屆けて下さらんか！　今日はも少ししなけりやならない事があるから。

ソーニャ　山林事務所はきつとお父さまのお氣にいりますわ……

（エレーナ、セレブリャコーフ、ソーニャ家へ入る。チェレーギン卓へ近づき、マリーナの傍に腰をかける。）

ヴイニーツキイ　この暑い息苦しい陽氣に、わが大學者先生は外套を着て、オヴーシューズをはいて、傘をもつて、おまけに手袋までご着用だ。

アーストロフ　つまり衞生に注意してゐるのさ。

ヴイニーツキイ　しかし何といふ美人だらう！　實に美人だ！　僕は生れてからあんな美しい女を見たことがない。

チェレーギン　ねえ、マリーナ・チモフェーヴナ、わたしは野原を歩いても、こんもりと茂つた庭の中を散歩しても、この卓子を見ても、全く何とも云へない仕合せな氣がしますよ！　お天氣と來たらまるでうつとりするやうだし、小鳥は歌をうたつてゐるし、わたしたちはみんな平和に仲よく暮してゐる――このうへ望むことはありやしません。（コップをとり上げながら）どうもまことに有難うございます。

ヴイニーツキイ　（夢を追ふやうに）あの眼……何て美しい女だらう！

アーストロフ　何か話をしないか、イワン・ペトローヴィッチ。

ヴイニーツキイ　（ものうげに）何を話すんだ？

アーストロフ　何か新しい事はないかね？

ヴイニーツキイ　なんにもありやしない。みんな古いことばかりだ。僕なんざ昔のまゝさ、いや、ひよつとすると、却つて惡くなつたかも知れないよ。なまけ者になつてしまつて、何一つしないで、耄碌爺みたいにぶつ〳〵云つてるばかりだからなあ。ところが、家の老いぼれ鴉と來たら家のママーと來たら、相變らず婦人解放論をさへづつて、片目では墓穴を睨んでるくせに、片目では七むづかしい本の中から、新生活の曙光を求めてゐるんだからね。

アーストロフ　ところで教授は？

ヴイニーツキイ　ところで教授と來たら、朝から眞夜中まで書齋にたれ籠めて、しきりと書きものだ。『智惠をしぼり、眉に八字をよせながら、われ等は絶えず歌を書く、一心不亂に歌を書く。さはれわれ等もその歌も、絶えて讃辭を聞かぬめり』さ。可哀さうなのは紙だ！　あの男は自分の自敍傳でも書いた方がよつぽどいゝだらう。こいつは全く素敵な題材だ！　退職教授で、ね君、乾からびた堅パンでさ、學問のある棒鱈だ……足痛風で、レウマチスで、偏頭痛で、おまけに肝臟は嫉妬と羨望で腫れ上つてゐる奴だ……この棒鱈は自分の先妻の領地に住つてゐるが、それは實のところ澁々ながらだ。なぜつて、町に住むのはご自分のお齒に合はないからさ。だから先生、年が年中ご自分の不仕合せを愚痴ること、愚痴ること！　ところが實際は、あの先生く

らゐべらぼうな仕合せ者はないんだよ。（神經的な調子で）　まあ君、どんなに仕合せ者だか、ちよいと考へて見るがいゝ！　だつて、下らない伴僧の伴がさ、給費生がさ、學位と椅子を乘つ取つて、閣下と呼ばれるやうになり、元老院議員の婿にまでなり濟したんだからなあ。その他まだ幾らでもあるだらう。併しまあ、こんなことはみんな下らない話だ。君、一つこゝの所を考へて見てくれたまへ。藝術なんてからつきし分つてゐない人間が、まる二十五年の間、藝術上の講義や著述をして來たんだから驚くだらう。あの男は、二十五年の間寫實主義（リアリズム）だの自然主義（ナチユラリズム）だの、その他あらゆる下らない事を摑まへて、他人の思想の嚼み直しをやつてゐたに過ぎないのだ。二十五年の間あの男が書いたり喋つたりして來たことは、利口な人間にとつてはずつと前からわかり切つてゐた事だし、馬鹿な人間にはてんでくそ面白くもない事なんだから、要するに、二十五年の間下らないことに無駄骨を折つてゐた譯だ。ところがそれにも拘らず、あの自惚はどうだ！　あの野心はどうだ！　今度退職してからと云ふものは、生きた人間の中で誰一人、あんな男を知つてるものはありやしない。あの男はちつとも有名ぢやないんだ。つまり二十五年間、他人の地位を占めてゐたのだ。ところがどうだい、あの歩きつぷりと言つたら、まるで半神半人だ！

アーストロフ　いや、どうも君はやつかんでゐるらしいね。

ヴイニーツキイ　あゝ、やつかんでるよ！　ところで、あいつが女に成功することはどうだ！　どんなドン・ホアンだつて、あれほど完全な成功は味はなかつたに違ひない！　あの男の先妻だつた僕の妹は、美しい柔和な女で、この青空のやうに淸らかで、氣高くて、神々しくて、あの男の弟子よりも、もつと澤山の崇拜者をもつてゐたものだ――それがどうだ、まるで純潔な天使が、自分と同樣に淸い、美しいものに對してのみ抱き得るやうな愛を、あの男に捧げてゐたものだ。僕の母、つまりあの男の姑は、今だにあの男を崇拜してゐる。そして今だにあの男は僕の母に、神聖なる恐怖を感じさしてるんだからね。あの男の二度目の妻君は美人で賢女だ――ほら、君もつい今しがた見たさ――それがだね、もうあんなに年をとつた男と結婚して、靑春と、美貌と、自由と、光輝とを捧げてしまつたのだ。それは一たい何のためだ？　どういふ譯だ？

アーストロフ　あの女は教授に貞淑なのかね？

ヴイニーツキイ　遺憾ながら、さうだ。

アーストロフ　なぜ遺憾ながらだね？

ヴイニーツキイ　なぜつて、この貞淑は徹頭徹尾まやかしものだからさ。あの中には修辭（レトリック）ばかり澤山あつて、論理（ロジック）はまるでない。厭で〳〵堪らない年寄の夫を裏切るのが不道德で、自分の不幸なる靑春と、生き〳〵した感情を殺してしまはうと努力するのが、道德にかなつた事なんだからね。

チェレーギン　（泣き聲で）　ワーニャ、わしはお前さんの口から、そんなことを聞くのはいやだ。ね、その全く……妻なり夫なりに背くものは、つまり不實な人間で、そんな人は自分の國にも背

くやうになるんだよ！

ヴイニーツキイ　（忌々しげに）口に栓をしろ。ワッフル！

チェレーギン　まあお聞きよ、ワーニャ、わしの家内は婚禮の翌日、わしの男前が惡いために、好きな男と一緒に逃げてしまつた。けれどその後も、わしは自分の務めに背かないでゐる。わしは今だにあれを愛してもゐるし、心中立てもしてゐるし、自分の力で出來る限りは助けてやつてもゐる。わしはあれと情夫の仲に出來た女の子の養育費に、自分の財産を投げ出して了つたんだよ。わしは幸福こそ奪はれたが、それでも自負心といふものが殘つてゐる。ところが、あれはどうだ？　青春はとつくに過ぎてしまつて、美しさは自然の法則通り色が褪めてしまふ、可愛い男には死なれる……それであの女に殘つたものは何だね？

（ソーニャとエレーナ登場。少したつてからマリヤ書物を持つて登場。腰をかけて讀む。乳母が茶を出すと、見向もしないで飲む。）

ソーニャ　（忙しげに乳母に）ばあや、あちらへ百姓たちが來たよ。行つて話しをしておくれ。お茶はわたしがするから……（茶を注ぐ）

（乳母退場。エレーナは自分のコップを取り、鞦韆に腰かけて飲む。）

アーストロフ　（エレーナに）わたしはご主人の診察に伺つたのです。あなたのお手紙によりますと、レウマチスと、それからまだ何やらで、大變お惡いやうに承知しましたが、拜見してみま

すと、ぴん〳〵してゐらつしやるぢやありませんか。

エレーナ　昨晩は大變ふさぎましてね、それに何ですか、足が痛いとか申してをりましたが、今日は平氣なのでございます……

アーストロフ　ところが、わたしはまた取るものも取りあへず、三十露里の道を飛んで來ましたよ。いやなに、かまひません、いま初めてぢやないんですからな。その代り、明日までお宅にとめていたゞきます。少くとも quantum satis（思ふ存分）ぐつすり寢ませう。

ソーニャ　結構ですわ。わたしどもにお泊りになるなんて、めつたにないことですもの。あなた多分お晝はまだでせう？

アーストロフ　まだです。食べません。

ソーニャ　それではおついでに召し上れな。わたし共はこのごろ六時過ぎにお晝なんですの。（飲む）まあ、冷たいお茶！

チェレーギン　サモワールの溫度がすつかり下つてをりますよ。

エレーナ　かまひませんわ、イワン・イワーヌイチ、冷たいまんまで飲みませうよ。

チェレーギン　失禮ですが……わたくしの名前はイワン・イワーヌイチではございません、イリヤー・イリイッチなので……イリヤー・イリイッチ・チェレーギン、或ひはまた人によりますと、わたくしの顏が痘痕面なものですから、ワッフルとも申します。いつかソーニャさんの名附親になつ

たこともありますし、あなたのご主人も――閣下もわたしをよくご存じでゐらつしやいます。だ今ではこの領地に住つてをりまして、お宅でご厄介になつてをります……お氣づきかも存じませんが、毎日ご一緒に食事も頂いてをります。

ソーニャ　イリヤー・イリイッチは、よくわたくしどもの手傳ひをして下すつて、大切な片腕なんですの。（やさしく）　さあ、をぢさん、もう一杯ついであげませう。

マリヤ　あつ！

ソーニャ　どうなさいまして、おばあさま？

マリヤ　わたしはアレクサンドルに言ふのを忘れてゐた……すつかり物覺えが惡くなつてしまつて……今日ね、ハリコフのバーゼル・アレクセーヂッチからお手紙を貰つたのだよ……新しく書きなすつた小冊子（パンフレット）を送つて下すつてね……

アーストロフ　面白いですか？

マリヤ　面白いんですけど、しかし何ですか妙な感じがいたしますね。七年まへに辯護したことを、今度は反駁してゐなさるんですもの。全く恐ろしくなりますよ！

ヴイニーツキイ　なんにも恐ろしいことはないさ。まあ、お母さん、茶でもおあがんなさい。

マリヤ　でも、わたしはお話がしたいんだよ！

ヴイニーツキイ　しかし、わたし達はもう五十年もくど〳〵話し合つたり、小冊子（パンフレット）を讀んだ

りしてゐるぢやありませんか。もうよしてもいゝ時分ですよ。

マリヤ　お前はなぜだか知らないが、わたしの話を聞くのが不愉快なやうですね。惡かつたらご免なさい。だがね、ジャン、お前はこの一年のうちに、すつかり變つてしまつたね、まるで別人のやうな氣がしますよ……以前はお前もしつかりした信念のある、光明に充ちた人格だつたけれど……

ヴイニーツキイ　えゝ、さうですとも、さうですとも！　わたしは光明に充ちた人格でしたよ。そのくせ、お蔭で明るくなつたと云ふものは、誰一人なかつたつけ……（間）わたしが光明に充ちた人格だつた……これくらゐ毒の強い皮肉はありますまいよ！　わたしは今四十七だ。なるほど、去年まではわたしもあなたと同じやうに、本當の生活を見まいとして、あなたのお好きなこの煩瑣哲學で、しひてわれとわが眼を覆ひかくさうと努めてゐたものです――それで而も、いいことをしてゐるやうにさへ考へてゐました。しかし今ではどうだ！　あなたはご存じないでせうが、わたしは一切のものを享有することの出來る時代を、ぶら〳〵とくだらないことに空費して、こんなに年をとつてしまつたために、今ではもう何一つ獲ることが出來ないのです。それを思ふと腹がたつて、忌々しくつて、夜もおち〳〵眠れないくらゐです！

ソーニャ　ワーニャ伯父さん、そんな話つまらないわ！

マリヤ（息子に）　お前はまるで、自分の昔の信念を咎めだてでもしてゐるやうだね……しか

し悪いのは信念ぢやなくて、お前自身なのですよ。お前はね、信念そのものは何でもない、死んだ文字に過ぎないつてことを、忘れてゐるのです……お前は仕事をしなければならなかつたのです。

ブイニーツキイ　仕事ですつて？　でもね、誰もかれもあなたのお好きな教授閣下みたいに、字を書く perpetuum mobile（永久の機械）になれるとは行きませんからね。

マリヤ　お前、それは一體何のことです？

ソーニヤ　（哀願的に）　おばあさま！　ワーニヤ伯父さん！　お願ひですから！

ブイニーツキイ　だまるよ。だまつて謝るよ。

間。

エレーナ　まあ、今日はなんていゝお天氣でせう……暑くもないし……

間。

ブイニーツキイ　首をくゝるには丁度いゝ日和だ。

（チエレーギン、ギターの調子を合せる。マリーナ、家の傍を歩きながら、鶏を呼ぶ。）

マリーナ　とう、とう、とう、とう……

ソーニヤ　ばあや、百姓達は何の用で來たの？

マリーナ　相かはらず同じことですよ、またあの荒地のことなんですよ。とう、とう、とう……

ソーニヤ　何を呼んでるの？

マリーナ　斑の牝鷄が雛つ子をつれて、どこかへ行つてしまつたんですよ……鴉にでもさらはれなければいゝが……（退場）

（チエレーギンはボルカを彈く。一同だまつて聽く。下男登場。）

下男　先生はこちらでございますか？（アーストロフに）　ミハイル・リヴーヴィッチ、どうぞおいでを願ひます。お迎への人が見えました。

アーストロフ　どこから？

下男　工場からで。

アーストロフ　（忌々しさうに）　ありがたい仕合せだ。仕方がない、行かなきやなるまい……（辷りを見廻して帽子をさがす）　どうも忌々しいな、畜生……

ソーニヤ　まあ、ほんとにいやですわねえ……ぢや、工場からお晝を食べにいらつしやいましな。

アーストロフ　いや、遲くなるでせうよ。どういたしまして……とても〳〵……（下男に）　なあ、お前、一つ俺に火酒（ヴォートカ）を一杯持つて來てくれないか、ほんとにさ。（下男退場）　どういたしまして……とても〳〵……（帽子をさがし出す）　オストローフスキイのある脚本の中に、途方もない長い

口髭を生やした、智慧のたりない男が出て來るが……丁度わたしがそれにそつくりだ。それでは、皆さん……（エレーナに）どうぞそのうちに、このソフィヤ・アレクサンドロヴナとご一緒に、わたしの方へもお立ち寄り下さいませんか。光榮に存じますよ。わたしの領地はごく小さなもので、みんなで三十町歩よりありませんが、それでも、もし趣味がおありでしたら、千靈里四方どこにも見られないやうな、模範的庭園と苗床をご覽に入れます。わたしの領地と並んで御料林がありますが……そこの森番が老人でしてね、始終患つてゐるものですから、從つて實際のところ、わたしが一切の事務を管理してゐるやうなものです。

エレーナ　あなたの森林ずきは、わたしもう幾度も承りましたわ。それはもう言ふまでもなく、大變有益なことに相違ありますまいけれど、あなたのご本職のお邪魔になりはしないでせうか？　だつて、あなたはお醫者さまぢやありませんか。

アーストロフ　我々の本職が何にあるかつてことは、たゞ神さまだけがご存じです。

エレーナ　それで、面白いとお思ひになりまして？

アーストロフ　えゝ、面白い仕事です。

ヴイニーツキイ　（皮肉に）實にね！

エレーナ　（アーストロフに）あなたはまだお若うございますわ、お見受けしたところ……さうですね、三十六か七でせう……ですから、あなたがおつしやるほど面白い筈がありませんわ。いつでも森々つて、わたし單調だと思ひますわ。

ソーニャ　いゝえ、そりやずゐぶん面白いんですよ。ミハイル・リヴーヴィッチは毎年あたらしく森を植ゑつけて、そのためにもう銅牌だの、褒狀だの貰つてゐらつしやるんですの。ドクトルは古い森を絶やさないやうにと、始終氣をもんでゐらつしやるんですからね。あなただつて、この方のお話をよくお聞きになつたら、すつかり成程とお思ひになりますわ。ドクトルのお說では、森林といふものは地上を裝飾して、人間に美を理解することを敎へ、莊嚴な氣分を起させるものだとおつしやるんですの。また森林は荒々しい氣候を柔げてくれます。氣候の溫和な國では、自然との爭鬪に力を浪費することが少いから、そこに住つてゐる人間はずつとおだやかで、優しく美しくて、しなやかで、興奮しやすくつて、言葉は綺麗で動作はしとやかです。さういふ處では科學も藝術も盛んだし、哲學は憂鬱でないし、婦人に對する態度は優美高潔です……

ヴイニーツキイ　（笑ふ）いや、上出來、上出來！……お話は一々結構だが、人を成程と思はす力はないね。そこで、（アーストロフに）ね、君、僕には依然として煖爐を焚いて、木で小屋を造ることを許して貰ひたいものだね。

アーストロフ　なに、煖爐は泥炭で焚くし、小屋は石で造ればいゝぢやないか。いや、尤も必要のためなら、森林を伐採することも認容するが、しかし何のために荒す必要がある？　露西亞の森林は斧の下で悲鳴をあげてゐるよ。幾千億といふ木立はだん〳〵滅びていつて、鳥獸の棲

家は荒される、河は淺くなつて涸れてしまふ。美しい風景は取返しがつかないくらゐ消えて行く。それといふのも人間がみんな無精で、體を屈めて土から焚物を拾ひあげるだけの分別がないからだ。（エレーナに）さうぢやありませんか、ねえ、奥さん？　こんな美しいものを煖爐で燃してしまつたり、自分が創りだすことも出來ないやうなものを破壞するなんて、無鐵砲な野蠻人でなけりや出來ることぢやありません。人間は自分に與へられたものを、益々殖してゆくために、理性と創造力を賦與されてゐます。ところが、今日まで人間は創造しないで、破壞ばかりしてゐたのです。森林はだん〳〵少くなる。河は涸れる、野禽はゐなくなる、氣候は惡くなる、そして土地は一日一日ます〳〵貧弱に醜くなるばかりだ。（ディニーツキイに）　ふむ、君はさも皮肉らしく僕を見てゐるね。君は僕のいふことを、何でも眞面目にきいてくれないのだ。それに……それに、或ひは實際、こんなことは偏屈人の仕事かも知れんが、しかし、僕は伐採の難を救つてやつた百姓の森のそばを通る時だの、或ひはまた自分の手で植ゑた若木の林が、ざわ〳〵鳴るのを聞く時などは、氣候も多少おれの力で左右されるなと意識するのだ。そして、もし千年の後人間が幸福になれるとすれば、その時は僕も、その幸福の幾分かを寄與してゐる筈だ、とかう思ふのさ。僕は自分で植ゑつけた小さな白樺の木が、その後やがて青々と茂つて、風にゆら〳〵搖れてゐるのを見ると、誇りで胸がいつぱいになる。そして、僕は……（火酒の洋盃を盆にのせて來る下男を見て）しかし……（飲む）もう行かなきやならん。結局まあ、こんなことはみんな偏屈人の仕事でせうよ。では、

機嫌よろしう！（家の方へ行く）

ソーニャ　（彼の手をとつて一しよに行く）今度いついらしつて？

アーストロフ　わかりませんな……

ソーニャ　またひと月もたつてから？

アーストロフとソーニャ、家の中へはいる。マリヤとチェレーギン、卓の傍に殘る。エレーナとディニーツキイ、露臺の方へ歩いて行く。

エレーナ　イワン・ペトローヴィッチ、あなたはまた仕樣のないことばかりなさいますのね。マリヤ・ワシーリエヴナに、perpetuum mobile（永久の機械）だの何だのと言つて、腹を立てさせることなんか要らないぢやありませんか！　今日もまた朝ご飯の時、アレクサンドルと口論をなさるし、何てつまらないことでせう！

ディニーツキイ　でも、僕があの人を憎んでゐるとしたら？

エレーナ　アレクサンドルを憎む譯なんかありませんわ。あの人だつて別にみんなと變りはないんですよ。別段あなたより劣つてはゐませんわ。

ディニーツキイ　もしもあなたが自分の顏や、自分の樣子を見ることが出來たらなあ……あなたは本當に、生きてゐるのが大儀さうです！　えゝ、全く大儀さうです！

エレーナ　えゝ、大儀でもあるし、退屈でもありますわ！　みんなが夫を惡く言つて、わた

しを氣の毒さうな目で見てゐます。不幸な女だ、年寄りの夫をもつて！　といふやうにね。皆がかうしてわたしに同情してくれる心持――あゝ、それはよく分ります！　つい今しがたも、アーストロフさんが何とおつしやつて――あなた方はみんな無分別に森を滅してゐる、やがて地上にはなんにもなくなるだらうつてね。丁度それと同じやうに、あなた方は無分別に人間を滅してゐるでになります。今にあなた方のおかげで、やがて地上には、貞節も、純潔も、犧牲的精神もなくなるでせうよ。どうしてあなた方は平氣で女を見てゐられないんでせう？　自分のものでないのなら、どうだつていゝぢやありませんか？　それといふのも――ほんとにドクトルのおつしやる通りですわ――あなた方は誰もかれも、破壞の惡魔にとりつかれてゐるのです。あなた方は森も、鳥も、女も、お互同志も、まるで可哀さうだとお思ひにならないんです……（間）

ヴイニーツキイ　あのドクトルは疲れたやうな、神經質な顏をしてゐますのね。面白い顏ですわ。

エレーナ　わたしはそんな哲學は嫌ひです。ソーニャはどうやらあの方がすきで、あの方に戀してゐるやうですが、わたしにも彼女の心は分りますわ。わたしがこゝへ來てから、あの方はもう三度もうちへ見えたけれど、わたしはこの逆り氣なものですから、一度もおち〳〵お話もしなければ、お愛想もしませんでした。あの方はわたしを意地惡だと思つたでせう。ねえ、イワン・ペトローヴイッチ、わたしとあなたがこんな仲よしなのは、きつと二人とも陰氣ください、退屈な人間だからですわねえ！　えゝ、陰氣ください人間

ですわ！　そんなにわたしの顏を見ないで下さい。わたし、そんなこと嫌ひですから。

ヴイニーツキイ　わたしがあなたを愛してゐる以上、かういふ風に見るより仕方がないぢやありませんか？　あなたはわたしの幸福です、生命です、わたしの喜びです！　わたしはそれに對して報いられる希望がごく僅かで、まるで零に等しいといふことを承知してゐます。しかし、わたしは何もいらない。たゞあなたを見、あなたの聲をきくことだけは許して下さい……

エレーナ　しつ、人が聞きますよ！（家の方へ行く）

ヴイニーツキイ　（彼女のあとを追ひながら）どうかわたしの愛を語ることは許して下さい。わたしを追ひのけないで下さい。これだけがわたしにとつて最大の幸福なんですから……

エレーナ　あゝ、何てつらいことだらう！……

チエレーギン、ギターの絃をならして、ポルカを弾く。マリヤは、小冊子の餘白に何か書いてゐる。

第二幕

セレブリャコーフ家の食堂――夜。――庭で夜番が拍子木を打つ音が聞える。
セレブリャコーフ、開け放した窓の前の安樂椅子に腰をかけて、うと〳〵とたゝろんでゐる。その傍にエレーナ・アンドレーヴナ、同じやうにまどろんでゐる。

セレブリャコーフ　（氣がついて）誰だ、そこにゐるのは？　ソーニャかい？

エレーナ　わたしですよ。

セレブリャコーフ　どうもたまらなく痛い！

エレーナ　あゝ、レーノチカ．あなた、床の上に膝かけがおちてゐますよ。（彼の足を包んでやる）アレクサンドル、窓をしめませう。

セレブリャコーフ　いや、よしてくれ、どうも息苦しい……わたしは今うと〳〵してる中に、何だか左の足が人のものになつたやうな夢を見たよ、恐ろしく痛むので目がさめた。いや、これは足痛風ぢやない、どつちかと言へばレウマチスだ。いま何時だね？

エレーナ　十二時二十分すぎですよ。（間）

セレブリャコーフ　あしたの朝、圖書室でバーチュシコフの本があるか捜してみてくれ。たしか、うちにあつた筈だが。

エレーナ　え？

セレブリャコーフ　あしたの朝バーチュシコフを捜してみておくれ。確かうちにあつたやうに覺えてゐるから。だが、どうしてかう息が苦しいのだらう？

エレーナ　あなた疲れてゐらつしやるんですよ。二晩もおやすみにならないんですもの。

セレブリャコーフ　ツルゲーネフは足痛風から心臟炎になつたといふことだが、わたしもさうならなければいゝが、どうも心配だ。年をとるといふのは、全く忌々しい厭なことだ。つく〴〵いやになるね。年をとつたら、わたしは自分で自分に愛想がつきたよ。だから、お前達だつてみんな、わたしを見るのが厭になつたに相違ない。

エレーナ　あなたはご自分がお年を召したのを、まるでわたしどものせゐのやうにおつしやいますのね。

セレブリャコーフ　お前などは一番わたしが厭なんだらうよ。

（エレーナ立ち上り、少しはなれて腰をかける。）

セレブリャコーフ　勿論お前がさう思ふのも尤もなのさ。わたしは馬鹿でないから、そのくらゐのことは分るよ。お前は若くて、丈夫で、美しくて、生きることを望んでゐる。ところが、わ

たしは老いぼれて、まるで死骸も同樣だ。どうも仕方がない。わたしには分りすぎるくらゐよく分つてゐるのだ。それは勿論、わたしが今日迄生き延びたのは馬鹿なことさ。だが、まあ待つてくれ、ぢきお前達をみんな自由にしてあげるから。いつまでもだら〳〵かうしてはゐないから。

エレーナ　わたし病氣になつてしまひますわ……後生ですから、もう默つて下さいよ。

セレブリャコーフ　お前の言つてることは、まるでわたしのお蔭で、みんなが病氣になつたかの樣に聞えるね。みんなが退屈して、自分の若い時を臺なしにしてゐるのに、わたし一人が生活を樂しんで、滿足してゐるといふ風に聞えるよ。あゝ、さうだとも、勿論さ！

エレーナ　默つて下さいよ！　あなたはわたしを苛めてばかりゐらつしやるのね！

セレブリャコーフ　わたしはみんなを苛めてゐるよ。勿論だよ。

エレーナ　（泣きながら）もう我慢が出來ません！　さあ、言つて下さい。一體あなたは、わたしにどうしろと仰しやるんですの？

セレブリャコーフ　どうもかうもないさ。

エレーナ　それでは、だまつて下さいよ。後生ですから。

セレブリャコーフ　どうも變だね。イワン・ペトローヴィッチか、それともあの老いぼれた馬鹿女のマリヤ・ワシーリエヴナが話しだすと――みんな何も言はずに、默つて聞いてゐるが、もしわたしが一言でも口をきかうものなら、すぐみんな自分を不幸なものだと感じはじめる。きつとわ

たしの聲さへ厭なんだらう。まあ假りに、わたしが厭な奴で、エゴイストで、暴君だとしておかう――が、それにしても、わたしはこの年になつてまでも、エゴイズムに對する幾分の權利をもつことが出來ないのだらうか？　一體それだけの値打はないのだらうか？　どうだね、一體わたしは氣樂な老後を送る權利もなければ、人の注意を要求する權利もないのだらうか？　一つ伺ひたいもんだ！

エレーナ　誰もあなたの權利をとやかく言ふものはありませんわ。（窓が風でぱたんと閉まる）風が出てきましたわ。窓をしめませう。（窓をしめる）いまに雨になりさうだ。誰だつてあなたの權利をとやかく言ふものはありませんわ。

（間。夜番が庭で拍子木をならし、唄をうたふ。）

セレブリャコーフ　わたしは全生涯を學問のために捧げ、自分の書齋と、講堂と、立派な同僚の交際に慣れてきた――それが突然、ひよつこりとこんな墓場へ落されて、毎日毎日、馬鹿な人間どもを見、くだらない話を聞かなければならんとは……わたしは生きたい、成功したい、名聲をあげてわい〳〵言はれたい。それだのに、こゝはまあどうだ――まるで配所だ。始終絶えまなく過去を懷かしみ、他人の成功に目を見張り、死をおそれる……あゝ、堪らない！　やりきれない！　しかも、その上に、みんなはわたしが年をとつたのを許さうとしないのだ！

エレーナ　もう少し我慢してお待ちなさいな、五六年もたてば、わたしもお婆さんになりま

すわ。

ソーニャ登場。

ソーニャ　お父さま、あなたつたら、アーストロフ先生を呼べつておつしやりながら、いざあの方がお見えになると、お會ひにならないんですもの。失禮ぢやありませんか。無獸に人さまへご迷惑をかけて・・・

セレブリャコーフ　お前のアーストロフなんか、わたしはどうでもいゝのだ。あの男の醫學の造詣は、わたしの天文學における程度だらう。

ソーニャ　あなたの足痛風のために、醫科大學の先生方を、すつかりこゝへ呼びよせるわけに行かないぢやありませんか？

セレブリャコーフ　あんな氣ちがひなんかを相手にして、わたしは話もしたくないよ。

ソーニャ　それはご勝手ですわ。（腰をかける）わたしはどちらでもかまひません。

セレブリャコーフ　いま何時だ？

エレーナ　十二時過ぎました。

セレブリャコーフ　どうも息苦しい・・・ソーニャ、卓の上にある水藥をとつてくれ！

ソーニャ　はい只今。（水藥をとつて渡す）

セレブリャコーフ　（癇癪らしい聲で）あゝ、それではない、何一つ頼むことも出來やしない！

ソーニャ　どうぞ我儘を仰しやらないで下さい。そりや、そんなことを喜ぶ人があるかも知れませんが、わたしはいやですわ。眞つ平ご免蒙ります！　わたしそんなこと大嫌ひですわ。それに第一暇がありません、あすは早く起きなければならないんですの。草刈があるんですから。

ヴイニーツキイ、腕卷姿で、蠟燭をもつて登場。

ヴイニーツキイ　外は嵐が來さうだ。（稻妻が光る）そら來た！　エレーナさんもソーニャも、あつちへ行つておやすみ。わたしが交代に來たから。

セレブリャコーフ　（憎えたやうに）あ、いや〳〵！　この人とさし向ひにしないでくれ！　いけない。また散々しやべりちらして、わたしを惱ますんだから！

ヴイニーツキイ　でも、この人達だつて休ましてやらなけりやいけませんよ！　もう二晩も寢ないんですからね。

セレブリャコーフ　まあ、勝手に行つて寢るがいゝが、しかし君にも行つて貰はう。有難う。お願だから昔のよしみに免じて、文句を云はないでくれ給へ。あとでまた話さう。

ヴイニーツキイ　（薄笑ひして）昔のよしみだつて・・・昔の・・・

ソーニャ　およしなさいよ、ワーニャ伯父さん。

セレブリャコーフ　（妻に）お前ね、頼むからこの人と二人きりにしないでおくれ！　又しやべり散らしてわたしを惱ますんだから。

ヴイニーツキイ　これはむしろ滑稽になつてくる。

（マリーナ、蠟燭をもつて登場。）

ソーニャ　お前、寢たらいゝぢやないの、ばあや。もう遲いよ。

マリーナ　卓子の上のサモワールも片づいてゐないんですもの、おいそれと寢られやしませんよ。

セレブリャコーフ　みんな寢ないで疲れてゐるのに、わたしだけが一人いゝ氣持になつてゐるのだ。

マリーナ　（セレブリャコーフに近寄つて優しく）如何でございます、旦那さま？　お痛みになりますか？　わたくしもやつぱり足がづき〳〵してゐるのでございますよ。（膝かけを直してやる）あなたさまのご病氣も久しいことでございますね。なくなつたゼーラ・ペトローヴナ――ソーニャのお母さまも、夜おち〳〵おやすみにならないで、苦勞してゐらつしやいましたつけ……あの方は隨分あなた樣をお思ひになつてゐらつしやいましたよ……（間）年寄りといふものは子供と同じことで、誰にでもいゝから、氣の毒なものだと思はれたいのでございます。ところが、年寄りは誰も氣の毒がる者がございませんよ。（セレブリャコーフの肩に接吻する）さ、旦那さま、お寢床へ參りませう……さあ〳〵、參りませう……菩提樹のお茶をこしらへてお飲ませしませう。そしてお足を暖めて差しあげませうね……神樣にお祈りもいたしますよ……

セレブリャコーフ　（感動して）行かう、マリーナ。

マリーナ　わたしもやつぱり足がづき〳〵してをりますよ。ほら、この通り！（ソーニャと一緒に彼つれて行く）ゼーラ・ペトローヴナは、いつもくよ〳〵心配して、泣いてばかりゐらつしやいましたよ……ソーネチカ、あなたはその時分まだほんとにお小さくて、たあいがなくてね……さあさ、いらつしやいまし、旦那さま……（セレブリャコーフ、ソーニャ、マリーナ退場）

エレーナ　わたしあの人のお蔭で、すつかりへと〳〵になつてしまつた。今にも倒れさうですわ。

ヴイニーツキイ　あなたはあの人のためでせうが、わたしは自分自身のために、へと〳〵になつて了ひましたよ。これでもう三晩も寢ないんですからね。

エレーナ　こゝは平和のない家ですわね。あなたのお母さまつたら、パンフレットと敎授の他は、何でもかでも憎んでゐらつしやるし、敎授は癇癖ばかり起して、わたしを信じないであなたを怖がつてゐますし、ソーニャはお父さまに不貞くされるばかりか、わたしにまで腹を立てて、もう二週間と云ふもの口もきかないでせう。それにあなたはまた夫が嫌ひで、ご自分のお母さまを面と向いて輕蔑してゐらつしやるんですものね。わたし氣がいら〳〵して、今日も二十遍くらゐ泣き出しさうになりましたわ……こゝはほんとに惠まれない家ですのね。

ヴイニーツキイ　哲學はよしませう！

エレーナ　イワン・ペトローヰッチ、あなたは教育もあり分別もあるお方ですから、世界は惡人や火事のために滅びるものぢやなくつて、憎しみだとか怨みだとか、さう云つたくだらないいざこざのために滅びるものだと云ふことは、ご存じの筈だと思ひますわ……ぐづ〳〵不平をいはないで、皆さんの間を平和にするのが、あなたの義務だと思ひますがねえ。

ヴイニーツキイ　まづわたし自身を平和にして下さい！　わたしの大切なエレーナ……（彼女の手に口を當てる）

エレーナ　およしなさい！（手をふりはなす）出て行つて下さい！

ヴイニーツキイ　もうぢき雨が上るだらう。そして自然の萬象はいき〳〵と甦つて、やすらかに息をつくことだらう。たゞわたし一人だけは、嵐も甦らせる事が出來ないのだ。自分の生活は永遠に失はれたといふ考へが、晝も夜も絶え間なしに、まるで魔物のやうにわたしを苦しめるのです。過去はない。過去はつまらない事に馬鹿々々しく浪費されてしまつた。しかも現在は恐ろしいほど無意味だ。これがわたしの生活とわたしの愛なんです。一體これをどこへやればいゝのです？　一體これをどうすればいゝのでせう？　わたしの感情は、どぶ穴の中へおちた太陽の光のやうに、空しく消えて行くのでせう。そしてわたし自身も、同じやうに自滅するのでせう。

エレーナ　あなたがわたしに愛のお話しをなさると、わたし何だか頭が馬鹿になつて、何と申し上げたらいゝか分らなくなりますわ。どうぞ勘忍して下さい、わたしなんにもあなたに申し

上げることが出來ないんですもの。（行かうとする）おやすみなさい。

ヴイニーツキイ　（道を塞ぎながら）ねえ、あなたはとてもご存じないでせうが、同じこの家の中で、わたしと竝んでもう一つの生命が――つまりあなたの生命が、じり〳〵に自滅してゐるのだと考へると、わたしは實に苦しくて堪らないのです！　一たい何をあなたは待つてゐらつしやるのです？　そこを合點して下さい、そこを……

エレーナ　（じつと彼の顔をみつめて）イワン・ペトローヰッチ、あなたは醉つてゐらつしやるのね！

ヴイニーツキイ　さうかも知れません、さうかも知れません……

エレーナ　ドクトルはどこですの？

ヴイニーツキイ　あの男はあちらに……わたしの部屋に泊つてゐます。さうかも知れません、さうかも知れません……どんなことでもあり得るわけですからね！

エレーナ　あなた今日もお飲みになつたんでせう？　なぜそんなことなさいますの？

ヴイニーツキイ　だつて何と言つても、少しは生活らしい氣がしますからね……どうか邪魔をしないで下さい、Hélène（レーン）！

エレーナ　以前あなたは決してお酒も召し上らなかつたし、こんなに澤山口數もお利きにならなかつたのに……あちらへ行つておやすみなさい！　わたしあなたのお相手は退屈ですわ。

ヴイニーツキイ　（彼女の手に口を當てながら）わたしの大事な……美しいエレーナ！

エレーナ　（忌々しさうに）かまはないで下さい。本當にかうなるともう厭らしくなりますわ。

退場。

ヴイニーツキイ　（一人）行つてしまつた……（間）十年前におれは亡くなつた妹の家で、よくあの女に逢つたものだ。その時あの女は十七で、おれは三十七だつたつけ。なぜあの時おれはあの女に戀して、結婚を申し込まなかつたのだらう？　そんなことは手もなく出來たかも知れないのだ！　さうすれば今頃、あの女はおれの女房になつてゐるのだ……さうだ……今おれたち二人は嵐で眼をさます。あの女が雷の音に驚くと、おれはあの女を自分の胸に抱きしめて、『怖がることはない、わたしがこゝにゐるから』と囁く。おゝ、何といふ美しい空想だらう、何ていゝ氣持だ、思はず笑ひ出したくなるくらゐだ……しかし、あゝ、なさけない、おれの頭の中は滅茶々々にこぐらかつてしまつた……なぜおれは年をとつたのだ？　なぜあの女はおれを理解してくれないのだ？　あの女の修辭（レトリック）や、だらしのない道德や、世界の破滅がどうのかうのと云ふ、馬鹿げただらしのない思想――あゝ、何もかもぞつとするくらゐいやだ。（間）あゝ、おれはどこまで欺かれてゐたのだらう！　おれはあの教授を――あのみじめな痛風やみを神さまのやうに崇拜して、まるで牛のやうに彼奴のために働いてゐたのだ！　おれはソーニヤと二人で、この領地から最後の一滴まで絞り出してしまつた。おれ達はまるで田舍商人みたいに、精進油や、豌豆や、凝乳な

どを賣つて、一カペイカ二カペイカのはした錢から、何千留といふ金を集めて、あの男に送つてやつた。そして自分たちは食べるものさへろくゝ食べやしなかつた。おれはあの男と、あの男の學問を誇りにしてゐた。おれはあの男によつて生き、あの男によつて呼吸してゐたのだ！　あの男が書いたり言つたりした事は、どんなことでも素晴らしいものゝやうに思はれてゐた……あゝ、ところが今はどうだ？　あいつはあの通り退職になつた。今こそ彼奴の生涯の總締めが見えてゐる。彼奴のあとには一頁の勞作さへ殘つてゐない。あいつはちつとも有名ぢやない。あいつは無だ！　シャボン玉だ！　おれは欺かれてゐた……今こそ分つた――おれはばかゝしく騙されてゐたのだ……

アーストロフ、胴衣もネクタイもつけずに、フロックコートを着て登場。一杯機嫌のてい。つゞいてチェレーギン、ギターをもつて登場。

アーストロフ　彈けよ！

チェレーギン　皆さんおやすみだよ。

アーストロフ　彈けよ！

チェレーギンそつと彈く。

アーストロフ　（ヴイニーツキイに）君、こゝに一人でゐたのか？　ご婦人方はゐないのかい？

（腰に兩手をあてながら低い聲で唄ふ）『小屋も飛び出せ、煖爐も踊れ、亭主やどこにも寢られない』だ……

僕は嵐で目をさましたんだよ、ひどい降りだつたね。いま何時だい？

ヴイニーツキイ　そんなこと誰が知るもんか。

アーストロフ　何だかエレーナ・アンドレーヴナの聲が聞えたやうだつたが。

ヴイニーツキイ　たつた今こゝにゐたのだ。

アーストロフ　素晴らしい女だ。（卓子の上の瓶を見て）こりや藥だね。この中にはどんなところの處方でも、ない奴つてないだらうなあ！　ハリコフのでも、モスクワのでも、トゥラのでも……全くあの人は自分の足痛風で、露西亞の町といふ町を閉口させてゐるのだ。一たい病氣なのかね、それとも病氣のふりをしてゐるのかね？

ヴイニーツキイ　病氣だよ。（間）

アーストロフ　どうしたんだ君、今日は馬鹿に悄氣てるぢやないか？　教授が可哀さうだとでも云ふのかね？

ヴイニーツキイ　うつちやつといてくれ。

アーストロフ　それとも、教授夫人に惚れてゐるとでも云ふのかい？

ヴイニーツキイ　あのひとは僕の親友だ。

アーストロフ　もう？

ヴイニーツキイ　『もう』とはどういふ譯だね？

アーストロフ　女が男の親友になるまでには順序があるよ。最初が友達で、その次が戀人で、最後が親友といふわけさ。

ヴイニーツキイ　俗物の哲學だ。

アーストロフ　どうしてさ？　いや、なるほどね……しかし白狀すると――僕は俗物になつたよ。そしてご覽の通り、醉つぱらつてもゐる。大抵ひと月に一度くらゐはこんな風に大酒をのむのだ。かういふ狀態になると、面の皮が厚くなつて、極端に圖々しくなるんだね。そしてこんな時には、僕はどんな事だつて平氣になつちまふんだよ！　思ひ切つてむづかしい手術に手をつけて、しかもそれを見事にやつてのけるし、未來に對してど豪い大きな計畫も描きだす。かういふ時、僕はもう自分で自分を變人だとは思はないで、人類に偉大なる……いゝかい、偉大なる貢獻をする人物だと確心するのだ！　さうしてまたかういふ時の僕には、自己獨得の哲學體系が生れる。そしてね、君達すべてがまるで小つぽけな蟲けらか……微生物のやうに見えて來るのだ。（チェレーギンに）おい、ワッフル、彈け！

チェレーギン　そりやお前さんの事だから、何でもしてあげたいのは山々だが、まあ考へてご覽じろ――家ぢうみんな休んでゐらつしやるぢやないか！

アーストロフ　いゝから彈けよ！

チェレーギン靜かに彈く。

アーストロフ　一杯やらなきや駄目だ。行かう。あつちにまだコニヤクが殘つてゐたやうだ。ところで、夜があけたらすぐ僕の家へ行かう。合點かい？　うちの看護手の奴はね、決して『合點』つて云はないで、『ごうてん、ごうてん』つて云ふんだよ。そりやもう恐ろしい惡黨なのさ。ところで、『ごうてん』かい？　（入つて來るソーニヤを見て）　いや、これは失禮、ネクタイもしないで。

いそいで退場。チエレーギンもその後につゞく。

ソーニヤ　ワーニヤ伯父さん。あなたまたドクトルと二人でお飲みなすつたのね。大變な豪傑同志が意氣相投じたもんだわ。そりやもうあの方はいつものことですけど、あなたまでどうなすつたの？　あなたのやうなお年で、そんなことなんかまるで不似合ひですわ。

ヴイニーツキイ　こんなことに年なぞどうもかうもないさ。人は本當の生活がなければ、幻に生きるもんだよ。とにかく、なんにもないよりはましだからね。

ソーニヤ　うちの乾草はすつかり刈つてしまつたのに、毎日々々雨が降りつゞいて、みんな腐りかけてゐるわ。それだのに、あなたは幻を追ふのがお仕事なんですか。あなたは家のことを、すつかり棄てておしまひになつたのね……わたし一人で働いて、もう精も根も盡き果ててしまひましたわ。（驚く）あら、伯父さん、眼に涙が！

ヴイニーツキイ　なに、涙だつて？　なんでもありやしない……つまらないことだ……お前が今わたしの顏を見た時、死んだお母さんそつくりだつたよ。可愛いソーニヤ……（姪の手と顏を、貪

るやうに接吻する）　あゝ、妹　なつかしい妹……今はどこにゐるだらう？　もし妹が知つたらなあ！　あゝ、妹が知つたらなあ！

ソーニヤ　なあに？　伯父さん、何を知つたらですの？

ヴイニーツキイ　苦しいのだ、いやな心持なんだ……なに、何でもないさ……あとで……いや、何でもないんだよ……どれ、行かうか……

退場。

ソーニヤ　（扉をたゝく）ミハイル・リヴーギッチ！　おやすみぢやないんですの？　ちよつと！

アーストロフ　（扉の向うで）たゞいま！（少したつて登場。もう胴衣もネクタイも着けてゐる）何ご用ですか？

ソーニヤ　ねえ、もしあなたが厭らしいとお思ひにならなかつたら、ご自分でいくらでも召し上れ。だけど、お願ひですから、伯父には飲ませないで下さい。あの人には毒なんですもの。

アーストロフ　よろしい。いや、もう飲みますまい。（間）わたしはすぐ家へ歸ります。いよいよきつぱり決めました。馬を車につけたりしてゐるうちに、夜があけませう。

ソーニヤ　雨が降つてゐますわ。朝までお待ちなさいな。

アーストロフ　嵐はわきの方へそれてゐますよ。なに、ほんの端つこの方がこぼれてるだけです。どれ、出掛けませう。どうかもうこれから、わたしをお父さんの所へ呼ばないで下さい。

伯父ワーニャ

わたしが足痛風だと云へば、お父さんはレウマチスだとおつしやるし、臥つておゐでなさいと云へば、起きてゐらつしやる。今日なぞはてんでわたしと話をなさらないんですからね。

ソーニャ 我儘になつてるものですから。（食器棚の中をさがして）何か一口めし上りたくはありませんか？

アーストロフ さうですな。頂いてもいゝですね。

ソーニャ わたしは夜分なにか頂くのが大好きなんですの。戸棚の中に何かあるやうですわ。父は、皆さんのお話によりますと、若い時ずゐぶん女の方にもてたさうですから、つまり女が甘やかして我儘にしてしまつたんですわ。さあ、チーズを召し上れ。（兩人戸棚の傍に立つて食べる）

アーストロフ わたしは今日なんにも食べないで、飲んでばかりゐましたよ。あなたのお父さんは實に氣むづかしやですな。（戸棚から壜をとり出す）いゝですか？（一杯のむ）こゝには誰もゐないから、正直な話をしますが、わたしはね、あなたの家には一月だつて暮せませんよ。こんな空氣のなかにゐたら、息が窒つてしまふだらうと思ひますよ……何しろあなたのお父さんときたら、あの足痛風と本のなかに、すつかりはまり込んでゐらつしやるでせう、ワーニャ伯父さんは憂鬱性であの通りだし、それからあなたのお祖母さん、おしまひが、ほら、例のまゝお母さんときてるでせう……

ソーニャ まゝ母がどうしまして？

アーストロフ 人間といふものは、何でも美しくなければなりませんな。顔でも、着物でも、心でも、思想でも。勿論あの方は立派な人です。しかし……たゞ食つて、寢て、散歩して、あの美貌でわれ〳〵一同を魅惑する、たゞそれだけの事ぢやありませんか。あの人には自分の職務といふものが更にない、みんな他のものが、あの人のために働いてゐるのです……さうぢやありませんか？ 無爲な生活は清い生活であり得ないですからね。（間）とは云ふものゝ、事によつたら、わたしはあまり苛酷な批判をしてゐるかも知れません。わたしもお宅のワーニャ伯父さんのやうに、生活に滿足してゐないのです。だから二人とも氣むづかしやなんですよ。

ソーニャ あなた生活に滿足してゐらつしやらないんですか？

アーストロフ 一般的に云へば、わたしは生活を愛してゐます。しかしわれわれの生活、ロシヤの田舍の平凡な生活は、とても辛抱できません。わたしは衷心から侮蔑してゐます。ところで、わたし一個の生活はどうかとなると、全くの話が、絶對に何のとり柄もありません。ね、假りにあなたが暗い夜、森の中を歩いて行くとしませう。その時もし遠くの方に、小さな灯が一つ光つてゐたらどうです。あなたは疲れたのも暗いのも、小枝の刺が顔をひつかくのも、まるで氣がつかないでせう……わたしは働いてゐる――これほあなたもよくご存じでせう――この郡内でわたしほど働くものは誰もない。運命が間斷なくわたしを打ちのめして、とき〴〵我慢が出來ないくらゐ、苦しくなつてくることがあります。しかも、わたしの生活には遠くに光る一點の火が

ないのです。わたしはもう自分のために何も期待しないし、何人も愛しません……もうずつと以前から誰も愛してゐないのです。

ソーニヤ　誰もですか？

アーストロフ　誰もです。たゞお宅のばあやだけに、ある優しみを感じてゐます――昔なじみですからね。何しろ百姓達は非常に單調で、蒙昧で、汚らしい生活をしてゐるし、さうかと云つて、インテリゲンチヤとはどうも調子が合ひにくい。インテリゲンチヤには閉口です。あの連中はわれわれの善良なる友達だが、考へが淺薄で感情が稀薄で、自分の鼻からさきのことはまるで見えない――何のことはない、たゞもう馬鹿なんです。少し利口な見ばえのする人間は、ヒステリイで、解剖と反省癖に蝕はれてしまつてゐます……かういふ手合ひは愚痴を言ふ、人を憎む、病的に讒謗を逞しうする。そして人に接するのにも、わきの方からそつと寄つて行つて、じろりと尻目にかけながら、『あゝ、あれは變態心理だ！』とか、『あれは法螺ふきだ！』とか一口に云つてしまふ。ところが、例へばわたしの額に、どういふレッテルを貼れば、いゝか分らないやうな時には、『あれは妙な奴だ、どうも妙な奴だ！』と云ふ。わたしが森がすきならこれも妙、わたしが肉を食はなければこれもやつぱり妙だとくる。まあ、かう云つたやうなもので、自然や人に對する直接な、清い、自由な關係は既にないのです……ない、全くない！（欲まうとする）

ソーニヤ　（おさへて）どうぞお願ひですから、もう召し上らないで下さい。

アーストロフ　なぜです？

ソーニヤ　そんなことは全くあなたに似合ひませんもの！　あなたは優美な方で、何とも云へない優しい聲をしてゐらつしやいます……それに、わたしの知つてゐるどなたよりも――お立派な方なんですもの。なぜあなたは、お酒を飲んだり歌留多遊びをしたりする、平凡な人達の眞似をなさりたいのでせう？　ね、そんなことはしないで下さい。お願ひですから！　あなたはいつもさう言つてらつしやるぢやありませんか――人間は創造といふことをしないで、たゞ天から與へられたものを破壞してゐるばかりだつて。どうして、一體まあどうしてあなたは、自分で自分を破壞なさるのでせう？　いけませんわ、いけませんわ、ね、お願ひですから、後生ですから。

アーストロフ　（手を差し伸す）もう今後のみますまい。

ソーニヤ　誓つて下さい。

アーストロフ　誓ひます。

ソーニヤ　（堅く手を握つて）ありがたう！

アーストロフ　もうお終ひだ！　禁酒しました。ご覽下さい　わたしはもうすつかり醒めました。このまゝで生涯の終りまでおし通します。（時計を見て）それでと、もう少しお話しませう。わたしは敢て云ひますが、わたしの時代はもう過ぎてしまひました、もう遲いです……年はとるし、餘り稼ぎ過ぎて俗にはなるし、感情といふ感情は鈍くなつてしまひましたよ。だから、わた

しはもう人に愛着することは出來まいと思ひます。わたしは誰も愛してゐません、また……愛するやうなこともないでせう。まだ何かわたしの心を囚へるものがあるとしたら、それは美です。わたしもそれだけには冷淡でないです。もしも、例へばあのエレーナ・アンドレーヴナがその氣にさへなれば、一日でわたしをのぼせ上らせてしまふことも出來ると思ひますね……しかし、これは愛ではないでせう。愛着ではないでせう……（片手で眼を蔽ひ身顫ひする）

ソーニヤ　どうなさいまして？

アーストロフ　なに、ちよつと……大齋期の時わたしの家で一人の患者が、痲醉劑にかゝつたなり死んだのをね。

ソーニヤ　そんな事はもうお忘れになつてもいゝ時分ですわ。（間）ねえ、ミハイル・リヴーギッチ……もしもわたしにお友達か妹かがあつて、もしその人が……まあ、假りに、あなたを思つてゐるとしませう。もしそのことをご存じになつたら、あなたはどういふ態度をお採りになりまして？

アーストロフ　（肩を竦めて）分りませんな。きつとどんな態度も採りますまいよ。まあ、わたしは愛することが出來ないと云ふことを、その人に悟らすやうに仕向けますね……それにまた、そんなことに頭が向いてないんです。それは兎に角、歸るとすれば、もう時間だな。ではさやうなら、お孃さん。こんな調子で話してゐたら、朝までお終ひになりさうもありませんよ。（手を握る）客間を通つて行つてもよろしいですか。でないと、あなたの伯父さんに引き止められる虞がありますからね。

退場。

ソーニヤ　（一人）あの方はわたしになんにもおつしやらない……あの方の魂も心も、まだ矢張りわたしに隱されてゐる。でも、どうしてわたしはこんな幸福な感じがするんだらう？（幸福のあまり笑ふ）わたしあの方に向いて、あなたは優美で氣品があつて、何とも云へないやさしい聲をしてゐらつしやると言つたが……あんなこと藪から棒に聞えやしなかつたかしら？　いまだにあの方の聲がふるへて、わたしを撫でてゐるやうだ……ほら、この空氣の中にそれが感じられるわ。でも、わたしが妹のことを言ひ出した時、あの方は分らなかつたのだ……（兩手を揉みしだきながら）あゝ、何て恐ろしいことだらう、わたしは器量が惡いんだもの！　何ておそろしい事だらう！わたし本當に自分の器量が惡いつて事を知つてゐる、よく知つてゐる……こなひだの月曜日に教會から出て來た時、皆がわたしの噂をしてゐるのが聞えたつけ。すると一人の女が、『あの方は親切で、鷹揚でいゝ方だけれど、惜しいことには、どうも不器量でねえ』つて言つたわ……不器量……

エレーナ登場。

エレーナ　（窓を開ける）嵐は通りすぎた。まあ、いゝ空氣だこと！（間）ドクトルはどちら？

ソーニャ　お歸りになりました。（間）

エレーナ　ソフィー！

ソーニャ　なあに？

エレーナ　一體いつまであなたは、わたしにそんな難かしい顏をして見せるの？　わたしたちはお互に何も惡い事なんかしやしないぢやないの。どうして敵同志みたいにしてゐなきやならないんでせうねえ？　もう澤山だわ……

ソーニャ　わたしだつて……（彼女を抱く）怒るのはもう澤山ですわね。

エレーナ　そりや結構だわ。（兩人興奮のてい）

ソーニャ　お父さまは寢てゐらして？

エレーナ　いゝえ、客間で起きてゐらつしやるのよ……わたし達はお互に、何週間も口をきかずにゐたのね。それもおまけにどうした譯なんだか、まるで分らなかつたんだからね……（食器棚の開いてゐるのを見て）これどうしたの？

ソーニャ　ミハイル・リヲーヂチがお夜食を召し上つたんですの。

エレーナ　お酒もあるのね……ねえ、一つ仲直りのしるしに飲まうぢやありませんか。

ソーニャ　えゝ、飲みませう。

エレーナ　一つの盃でね……（注ぐ）この方がいゝわ。ぢや、もうお前と言つていゝわね？

ソーニャ　えゝ、いゝわ。（兩人飲んで接吻する）わたしずつと前から仲直りがしたかつたんですけど、いつも何だか後ろめたくつて……（泣く）

エレーナ　お前なにを泣いてゐるの？

ソーニャ　何でもないの。わたしたゞちよつと。

エレーナ　さ、もうおよし、およし……（泣く）馬鹿ね。わたしまで泣きだしたわ。（間）お前は何だか、わたしが算盤つくで、お父さまと結婚でもしたやうに考へて、それで怒つておゐでだけれど……もしお前が誓ひといふものを信じるなら、わたし誓つてあげてもいゝわ……わたしは愛のためにあの方と結婚したのよ。わたしがお父さまに夢中になつたのは、つまり學問があつて有名な人だつたからなの。この愛は本當のものぢやなくつて、人工的のものだつたけれど、わたしばその時、本當の愛のやうな氣がしたの。だから、わたしが惡いんぢやないんだよ。だのにお前は、わたしたちが結婚したそも〳〵の日から、その利口さうな疑り深い眼で、いつも〳〵わたしを咎めてゐたのね。

ソーニャ　あら、もう仲よしよ、仲よしよ！　忘れませうね。

エレーナ　そんな風に人を見るものぢやないことよ――お前にも似合はない。どんな人でも信じなければいけません。でないと、生きてることなんか出來なくてよ。（間）

ソーニャ　ねえ、もうお友達なんですから、ほんたうのことを聞かして下さいね。あなたお仕

合せ？

エレーナ　いゝえ。

ソーニャ　わたしそのことは知つてゐましたわ。ぢや、も一つ訊きますわ。打ち明けて言つて下さいね――あなた若い夫を持ちたいとお思ひになつて？

エレーナ　お前、まだほんとに子供ね。そりやあ勿論思つてよ。（笑ふ）さあ、いゝから、もつと何でもお訊き、訊いて頂戴……

ソーニャ　あなたドクトルはお好き？

エレーナ　えゝ、隨分。

ソーニャ　（笑ふ）わたし馬鹿みたいな顔してゐるでせう……さうでせう？　あの方はさつきお歸りになつたんですけど、わたし今だにあの方の聲と、足音が聞えるやうな氣がしますの。暗い窓を見ると――そこにもあの方のお顔が浮き出して來ますの。どうぞわたしにすつかり言はして頂戴……でもこんなに大きな聲では言へませんわ、わたし恥かしいんですもの。わたしの部屋へ行つて、あちらでお話しませうね。あなたの目にはわたしが馬鹿みたいに見えるでせう？　白狀なさいよ……あの方のことを何か聞かして下さいね……

エレーナ　何をさ？

ソーニャ　あの方は賢い人ですわ……何でもご存じで、何でもお出來になるんですもの……病

人の治療もなさるし、森林の栽培もなさるし……

エレーナ　森林や醫學なんかが問題ぢやないのよ……これはね、お前、才（クラント）といふものなのよ！　お前タラントとはどういふものか知つてて？　それはね、勇氣なの、自由な頭腦なの、大膽で大仕掛けな遣り口なの……かりに一本の木を植ゑるにしたつて、それが千年の後はどうなるかといふ事を、もうちやんと考へてゐて、そこに人類の幸福を夢みてゐらつしやるのです。さういふ人はほんとにめづらしい、さういふ人こそ愛さなければならないんですよ……あの方がお酒を飲んだり、とき〴〵亂暴な事を言つたりなすつたつて――それがどうしたんだらう？　ロシヤでは才のある人も純潔でゐられないんだもの。まあお前、考へてもご覽、あのドクトルの生活はどういふものだと思つて！　道といふ道は歩くことも出來ないやうなぬかるみだし、寒さは身を切るやうだし、吹雪は吹きまくるし、道のりと云つたら、どのくらゐあるか分らないほどだし、人間は半野蠻ながさ〳〵した連中ばかりだし、まはりを取り卷くものは貧乏と病氣ばかりなんだもの。かういふところで働いて、毎日々々爭鬪を續けてゐる人が、四十近くなるまで、お酒も飲まないで純潔に身を守つて行くなんて、なか〳〵出來ることぢやありません……（ソーニャを接吻する）わたしはお前のために、心から幸福を望んでゐてよ、お前はそれだけの値打があるんだもの……（立ち上る）わたしなんぞ陰氣くさい女で、ほんの挿話のやうな人物なのよ……音樂をしても、夫の家にゐても、いろんなローマンスの中でも――つまりいつでもわたしは、たゞほんの挿話の

やうな人物だつたばかりなのよ。本當のことを云へばね、ソーニャ、よく〳〵考へると、わたしそれは〳〵不幸な身の上なのよ！（興奮して舞臺を歩き廻る）わたしのためには、この世に幸福なんてものはないんだわ。えゝ、ありやしない！　何をお前わらつてるの？

ソーニャ　（笑つて顏をかくす）わたしもう本當に幸福なの……幸福なのよ！

エレーナ　わたし彈きたくなつた……何か彈いてみようかしら。

ソーニャ　えゝ、彈いて。（彼女を抱く）わたし眠れないんですもの……彈いて頂戴！

エレーナ　えゝ、いますぐ。だけど、お父さまが寢てゐらつしやらないんだからね。あの方は病氣のとき音樂を聽くと、じり〳〵なさる質なのよ。行つて伺つてご覽なさい。かまはないと仰しやつたら彈くから。行つてらつしやい。

ソーニャ　えゝ。（退場）

庭で番人が拍子木を鳴らす。

エレーナ　隨分しばらく彈かなかつたわ。彈いて、泣きませう、馬鹿のやうに泣きませう。（窓を覗いて）お前かえ、かち〳〵言はせてるのは、エフィーム？

番人の聲　へい、わしで！

エレーナ　かち〳〵言はせないでおくれ。旦那さまがご病氣なんだから。

番人の聲　へい、すぐあちらへ參ります！（口笛を吹く）こら〳〵、黑！　黑！（間）

ソーニャ　（戻つて來て）いけませんて！

——幕——

第三幕

セレブリャコーフ家の客間。左右、中央の三ところに戸口がある。――晝。
ヴイニーツキイとソーニャ腰かけてゐる。エレーナは何か考へながら舞臺を歩き廻つてゐる。

ヴイニーツキイ　けふ午後一時までに、一同この客間へあつまれといふ、教授閣下のご命令がくだつたが、（時計を見て）もう一時十五分前だ。何か一家眷族に言つて聞かせたいと仰しやるのだ。

エレーナ　多分なにかご用があるんでせう。

ヴイニーツキイ　あの人に用なんかあるものか。くだらないことを書く、口小ごとを言ふ、やきもちをやく、それだけの事だ。

ソーニャ　（咎めるやうな調子で）伯父さん！

ヴイニーツキイ　いや、いや、失禮。（エレーナを指して）ご覽、あの人を。大儀さうにふら〳〵歩きまはつてゐる。實に風情があるね！　實に！

エレーナ　あなたは一ぢぶつ〳〵言つてらつしやるのね、のべつぶつ〳〵言ひ通して――よくお倦きにならないこと！（憎ましさうに）わたし退屈で死にさうだわ。どうしたらいゝか分らない。

ソーニャ　（肩を竦めて）仕事はいくらでもありますわ、しようとさへお思ひになれば。

エレーナ　例へば？

ソーニャ　家の仕事をしたつていゝし、子供にものを教へたつて、病人を療治してやつたつていゝでせう。仕事はいくらでもありますわ。現にあなたやお父さまが、こゝへいらつしやらなかつた時分、わたしはワーニャ伯父さんと一緒に、よく市場へ麥粉を賣りに行つたものですわ。

エレーナ　わたしそんな事は出來ない。それに面白くもないわ。百姓にものを教へたり、療治したりするなんて、そんなことは理想派の小説の中にあるだけよ。どうしてわたしが、何といふきつかけもないのに、急に出て行つて物を教へたり、療治したり出來るもんですか？

ソーニャ　ところがわたしは、どうしてそれをしずにゐられるのか分りませんわ。まあ、今に見てらつしやい、すぐお慣れになりますわ。（彼女を抱く）そんなに詰らなささうにしちや厭よ。（笑ふ）あなたは退屈で退屈で、身のおき場もないやうですわね。ところが、この退屈と不精と云ふものは傳染するものよ。ごらんなさい。ワーニャ伯父さんは何もしないで、まるで影のやうにあなたの後ばかり追つてゐるでせう。わたしはお仕事をそつちのけにして、あなたのところへお話しに飛んで來るでせう。わたしすつかり不精者になつちやつたわ。だつて出來ないんですもの！ドクトルのミハイル・リヴーギッチだつて、以前わたし共へ見えるのはほんとに時たまで、月に一

度くらゐ來て頂くのも容易ぢやなかつたんですけど、この頃あの方は、ご自身の林も病人もうつちやらかして、毎日こゝへおいでになるんですもの。あなたは魔法使よ、きつと。

ヴイニーツキイ 何をくよ〳〵してるんですか？（いきく〳〵と）ねえ、わたしの大事な、美しいエレーナ、もつと利口におなんなさい！ あなたの血管には妖精（ニムフ）の血が流れてゐます。いつそのこと、妖精（ニムフ）になつてお了ひなさい。そして早く誰かほかの水の魔物に、首つたけ戀してごらんなさい——教授閣下やわれわれ一同が呆氣に取られるくらゐ、一生に一度おもひ切つてずぶりと深みへはまつてご覽なさい！

エレーナ （怒つて）わたしに構はないで下さいよ！ まあ、何て酷い言ひ方でせう！（行かうとする）

ヴイニーツキイ （引き止める）まあ、まあ、エレーナ、堪忍して下さい……あやまりますよ。（手に接吻する）和睦、和睦。

エレーナ 本當に天使だつて我慢しきれませんわ。あなた、考へてもご覽なさい。

ヴイニーツキイ 和睦のしるしに今薔薇の花束を持つて來ませう。今朝がた、あなたのために摘んでおいたのです……秋の薔薇……美しい惱ましさうな薔薇です……

退場。

ソーニヤ 秋の薔薇……美しい惱ましさうな薔薇ですつて……（兩人窓から外を眺める）

エレーナ もう九月ねえ。まあ、どうしてわたしたちはこゝで冬を暮すのだらう！（間）ドクトルはどちら？

ソーニヤ ワーニヤ伯父さんのお部屋ですの。何か書きものをしてらつしやいますわ。ワーニヤ伯父さんが行つてくれてまあよかつた。わたしあなたにお話しなきやならない事がありますの。

エレーナ どんなこと？

ソーニヤ どんなことつて。（彼女の胸に顏をおしあてる）

エレーナ さ、もう澤山、もう澤山……（彼女の髪をなでる）もう澤山よ。

ソーニヤ わたし器量が悪いんですもの。

エレーナ あなたはいゝ毛をしてゐるわね。

ソーニヤ いゝえ！（鏡にうつる姿を見ようとして振り返る）いゝえ。女が器量が悪いと、人は決つて、『あなたは美しい眼をしてるのね』とか、『あなたは美しい毛をしてるのね』とか言ふものだわ……わたしあの方のことを、もう六年も想つてゐるんですの、自分のお母さまより、もつと〳〵愛してゐますわ。いつでも、あの方のお聲が聞えるやうな氣がするし、あの方の握手が手に殘つてゐるやうな心持がしますの。そしてしじう戸の方をじつと見つめて、心待ちに待つてゐますの。だつて、わたしどんな時でも、あの方が今にも入つていらつしやるやうな氣がするんですもの。ねえ、もう分つてらつしやるでせうけれど、わたしあの方の噂をするために、かうしてしよつちう、

あなたのとこへ來てゐますのよ。あの方はこのごろ毎日こちらへお見えになるけれど、わたしの方なんか見向いても下さらないんですもの。まるで目に留めて下さらないんですもの……それは隨分苦しい事ですわ！　わたしもうまるで希望がないんですの、えゝ、ありませんとも、ありませんとも！（絶望的に）あゝ、神様、どうかわたくしに力を授けて下さいまし……わたし昨夜よつぴてお祈りしました……わたしよくあの人のところへ行つては、自分の方からお話をし掛けたり、あの人の眼を見つめたりするんですの……わたしもう何の誇りもありません、自分を制する力もありません……昨日も我慢が出來なくなつて、ワーニャ伯父さんに、あの方を戀してることを打ち明けてしまひましたの……わたしがあの方を戀してゐることは、召使たちだつてみんな知つてゐますわ……誰だつて知つてゐますわ。

エレーナ　で、あの人は？

ソーニャ　あの方はあたしのことなんかお氣がつかないんですの。

エレーナ　（物思はしげに）あの人は變人ね……ねえ、ソーニャ。わたしあの人にお話して見ませうよ……なるたけ用心して、それとなく仄めかすやうにね……（間）ほんとにさうしていつまでも譯が分らなくなつてはねえ……ね、いゝでせう！

ソーニャうなづく。

エレーナ　それで結構だわ。愛してゐるかゐないか――それくらゐの事を知るのは難かしかなくつてよ。お前そんなにわく〳〵することはないわ、ね、いゝ子だから、心配しないでおゐで――わたしは氣どられないやうに、そつと用心して訊くからね、唯、否か應か、それさへ分ればいゝんでせう？（間）もしいやなら、こゝへ出入りして貰はないやうにするんだね。さうでせう？

ソーニャうなづく。

エレーナ　見ないでゐれば氣が樂だからね。いつまでもだら〳〵延さないで、今すぐあの人に訊いて見ませう。丁度あの人はわたしに何か圖面を見せるつて言つてたから……ちよつとね、わたしが圖面を見たいからつて、行つてさう言つてらつしやい。

ソーニャ　（非常に興奮して）あとですつかり本當のことを聞かして下さる？

エレーナ　そりや無論のことよ。わたしが思ふのにはね、ほんたうの事つてものは、たとへどんなことにもせよ、まるで分らずにゐるほど恐ろしくないわ。とにかく、わたしに委せてお置きなさいね、いゝ子だから。

ソーニャ　えゝ、えゝ……わたしあなたが圖面を見たがつてゐらつしやるつて、さう言ひますわ……（行きかけて戸の傍に立ち止る）いや、矢張りわからない方がいゝわ……何と云つてもまだ心望みがあるから……

エレーナ　なあに？

ソーニャ　なんでもないのよ。

浪場。

エレーナ　（一人）ひとの祕密を知りながら、どうすることも出來ないくらゐ厭なことはないわ。（考へ込む）あの人はあの子を愛してゐない――それはもう分り切つてゐる。だけど、なぜあの人があの子と結婚してはならないのだらう？　あの子は器量こそ悪いけれど、あの年配の田舎醫者には結構な奥さまだわ。利口で、親切で、純潔で……いや、こんな事ぢやない、こんな事ぢやない……（間）わたしはあの可哀さうな子の心持がよく分る。こんな堪らない退屈な中にゐて、まはりには人間の代りに、何かしら灰色のしみのやうなものがうろ〳〵して、いつも同じやうな平凡なことが聞えるばかり、そしてたゞ食べて、飲んで、寢ることしか知らないやうな世界にゐるんだもの、時々かうして、ほかの者とは似もつかない美しい、立派な、魅力のあるドクトルがやつて來るのは、ほんとに闇の夜に明るい月が出たやうなものだからねえ……あゝいふ人に魅せられて、夢中になつてしまふのはもつともだ……現にわたしも、何だか少し引きつけられてゐるらしいわ。さうだわ、わたしはあの人がゐないと詰らないし、あの人のことを考へると、につこり笑ひたくなるんだもの……あのワーニャ伯父さんがさう云つたつけ、わたしの血管に妖精（ニムフ）の血が流れてゐるつて。『一生に一度でもいゝから、自分の思ふ存分にしてごらんなさい』だつて……さうねえ？　事によつたら、本當にさうしなければならないのかも知れないわ……あゝ、小鳥のやうに自由になつて、みんなの傍を離れて了つたら――あの眠つたさうな顔も見えなければ、く

だらないお喋りも聞えない所へ飛んで行つて、あんな人たちがこの世に生きてゐると云ふ事も忘れてしまへたら……だけど、わたしは臆病で氣が小さいから……良心が咎めて仕方がないだらう……現にあの人が毎日こゝへやつて來ると、わたしはあの人がこゝへ來る譯を察してゐるものだから、もう何だか自分が悪いやうな氣がして、ソーニャの前に膝をついて、泣いて詫びをしたいくらゐに思ふんだからねえ……

アーストロフ統計地圖を持つて登場。

アーストロフ　今日は！（握手する）わたしの圖面を見たいと仰しやるのですか？

エレーナ　だつて昨日あなたは、お仕事を拜見させて下さるやうに約束なすつたでせう……あなたお暇ですの？

アーストロフ　えゝ、勿論ですとも。（圖面を歌留多卓の上にひろげ鋲でとめる）あなたはどこのお生れですか？

エレーナ　（手傳ひながら）ペテルブルグでございます。

アーストロフ　それで教育をお受けになつたのは？

エレーナ　音樂學校ですの。

アーストロフ　それぢやあなたは、こんなことなんか面白くないかも知れませんな。

エレーナ　なぜでございますの？　尤も田舎の事は存じませんけれど、本ではずゐぶん讀み

ましたの。

アーストロフ こちらのお宅にはわたしの卓がおいてあるんですよ……イワン。ペトローギッチの部屋に。それで、腑ぬけのやうになつてしまふくらゐ、へと〳〵に疲れきつた時分には、何もかもうつちやらかして、こちらへ馳せつけるのです、そして一時間なり二時間なり、こんないたづらをして樂しむのです……イワン。ペトローギッチとソフィヤ アレクサンドロヴナが算盤をぱちぱちやつてゐると、わたしはその傍で自分の卓に向つて、繪具を塗りこくるのです……すると、實にあたゝかい靜かな感じがして、こほろぎの聲も聞えようと云ふ譯です。だが、かういふ樂みはさうしよつちうはやりません。せい〳〵月に一度くらゐで我慢します……（圖面を指しながら）ところで、こゝをご覽なさい。五十年前におけるこの郡の圖解です。濃淡二色の綠は森林を表はしたもので、全面積の半分は森林で占領されてゐます。綠の上に赤い網目のあるところには、おほじかや山羊が棲んでゐるのです……わたしはこの圖面で植物區系や、動物區系まで示したんですよ。この湖水には白鳥だの、雁だの、鴨だのが棲んでゐましてね、古老の話では、こゝにはあらゆる鳥が無盡藏に群集してゐて、まるで雲のやうに空を飛んでゐたものださうです。大小の村落のほか、この通りあちこちに、いろ〳〵な移住民の家屋だの、農舍だの、分裂派の寺だの、水車だのが散在してゐます……牛や馬の類も澤山ゐたものです。空色の繪具でそれが分るやうになつてゐます。例へば、この村には空色が濃く塗つてありますが、こゝは馬が非常に澤山ゐたところ

で、一戸について三頭の割合だつたさうです。（間）今度は下の方をごらんなさい。これが二十五年前の光景です。そこへ來ると、もう森林は全面積の三分の一しかありません。山羊はもうゐません、併しおほじかはをります。綠と空色の繪具も次第に淡くなつて行きます。その他、萬事さう云つた風です。さて、第三圖へ移りませう。これが現在における本郡の狀況です。綠色はどうやら、そこゝにありますが、連續してゐません。ぽつ〳〵斑になつてゐます。おほじかも、白鳥も、山雞も見えなくなつてしまひました……往時の移住民の家屋だの、農舍だの、分裂派の寺だの、水車場だのは跡かたもありません。概して、徐々に確實に廢頽して行く有樣がまざ〳〵と見えてゐます。左樣、いま十年か十五年たつたら、完全に亡びて了ふでせうよ。あなた方はそれを文明の影響だとか、舊生活は自然の順序として新生活に席をゆづらなければならない、とか仰しやるでせう。なるほど、もしこの亡ぼされた森林の跡に、村道や鐵道が通つたとか、製造所や工場や學校が出來たとかいふのなら――人民ももつと健康に、もつと裕福に、もつと利口になつたでせうが、それらしいものは何もないぢやありませんか！ 郡内にあるのは、依然たる沼地です。蚊です。依然たるひどい惡路です。貧困です。チブスと、ヂフテリヤと、火事です……こゝに於て、われわれの對象となつてゐるものは、すなはち力に餘る生存競爭から來た地方の頽廢です。この頽廢は惰性と、無智と、極端の無自覺から生れたものなんです。つまり餓ゑ凍えて病み疲れた人間が、僅かばかり殘つた自分の生命力を救ひ、子供を守り育てるために、苟くも餓をし

のぎ暖をとることが出來るものならば、何でも本能的に無意識にすがり附いたのです。明日の日のことを考へる餘裕もなく、一切を破壞して了つたのです……かうして殆どすべてのものが破壞されました。しかもその代りとして、まだ何物も創造されてゐないのです。（冷やかに）どうもお顏付で見ると、あなたはこんな話なぞ面白くなささうですね。

エレーナ　でも、わたしかういふ事はまるで分らないんですもの……

アーストロフ　分るの分らないのと云ふやうな話ぢやありません。たゞもう面白くないのです。

エレーナ　正直なところを申しますと、わたし少々ほかの事に氣を取られてゐたものですから。ごめん遊ばせ。わたしちよつとあなたに、お訊ねしなければならない事がありますの。でも、何だかどぎまぎして、どう切り出したらいゝか分りませんの。

アーストロフ　訊ねたいことですつて？

エレーナ　えゝ、お訊ねしたいことが。でも……ごく罪のない事なんですの。とにかく、掛けませう！（兩人腰をかける）實はある若い人の事なんですの。お互に正直にお友達らしく、齒に衣きせず、ざつくばらんにお話しませう。お話したら、その場限り忘れてしまひませうね。よございますか？

アーストロフ　承知しました。

エレーナ　實は、わたしの義理ある仲のソーニャの事なんですが、あなたあの子がお好きでゐらつしやいますか？

アーストロフ　えゝ、尊敬してゐます。

エレーナ　女としてお好きですの？

アーストロフ　（ちよつと口籠る）いゝえ。

エレーナ　では、あと二こと三ことね――それでおしまひに致しますわ。あなた、何にもお氣づきになりませんでしたか？

アーストロフ　別に何にも。

エレーナ　（彼の手をとる）あなたはあの子を愛してゐらつしやらない、それはお眼でよくわかりますわ……ところが、あの子は惱んでをりますの……どうぞこの事を汲んで下さいまして……今後宅へいらつしやるのをやめて下さいませんか。

アーストロフ　（立ち上る）わたしの時代はもう過ぎてしまひましたよ……それに暇もありませんから……（肩を竦める）どこにそんな暇がありませう？（まごつく）

エレーナ　あゝあ、何て不愉快なお話でせう！　わたし何ですか、まるで千プードからあるものを脊負つて歩きでもしたやうに、胸がどき〳〵致しますわ。でもまあ、濟んでしまつてよございました。もうなんにもお話しなかつたことにして、さつぱりと忘れてしまひませうねえ、そし

て……そして、どうぞこゝをお立ちになつて下さい。あなたは分別のあるお方ですから、察して下さいますわねえ……（間）わたしほんとに赤面してしまひましたわ。

アーストロフ　もしあなたが一箇月か二箇月前にこの話をなすつたのでしたら、或ひはわたしも考へて見たかも知れませんが、併し今となつては……（肩を竦める）だが、あの人が苦しんでをられるとすれば、勿論……たゞ一つわかりませんな。なぜあなたはこんなことを訊く必要があつたのでせうか？（彼女の眼を見つめ、指を立てて脅かして見せる）あなたは――ずるい！

エレーナ　それはなんの事ですの？

アーストロフ（笑ひながら）ずるいんですよ！　まあ假りに、ソーニャさんが苦しんでゐるとしませう、それはわたしも進んで是認します。しかし、何だつてあなたがこんなことをお訊きになるのですか？（彼女が何か言はうとするのを遮りながら早口に）まあ、そんなに吃驚りした顔をしないで下さい。なぜわたしが毎日こちらへ上るかといふことは、あなたもよくご存じでせう……なぜ、誰のために來るか、それはあなたもちやんとご存じの筈だ。ねえ、可愛い猛獸さん、そんな顔をして見ないで下さい。わたしは老いぼれの雀ですからね。

エレーナ（けゞんさうに）猛獸ですつて？　何のことだかまるで分りませんわ。

アーストロフ　美しい、毛のふさ〳〵した毬ですよ……あなたは犧牲になる相手が入り用なのです！　ね、わたしはもうまる一月なんにもしません。みんな一切うつちやらかして、貪るやうにあなたの跡ばかり追ひまはしてゐます――ところが、これがたまらなくあなたの氣に入つてゐるのです、たまらなく……さあ、どうです？　わたしは征服されました。こんなことはお訊ねにならなくつたつて、ちやんとご存じの筈ですよ。（兩腕を組み頭を下げる）さあ、どうぞご隨意に餌食にして下さい！

エレーナ　あなた氣でもちがつたんですか！

アーストロフ（齒を食ひしばつて笑ふ）あなたは遠慮ぶかい方ですね……

エレーナ　まあ、わたしはあなたが考へてゐらつしやるより、もすこし立派な高尚な女ですわ！　えゝ、誓つて。（行かうとする）

アーストロフ（道を塞ぎながら）わたしは今日たちます。もうこちらへは來ません。しかし……（彼女の手を取りあたりを見廻す）どこで逢ひませう？　さ、早く言つて下さい、ねえ、どこで？　誰か來るといけません、早く仰しやい、早く……（熱情的に）何といふ美しい、何といふ素晴らしい方でせう……たつた一度だけキッスを……その薫の佳い髪の毛に、ちよつと接吻するだけでいゝんですから……

エレーナ　わたし誓つて……

アーストロフ（遮りながら）何を誓ふのです？　何も誓ふことなんかありませんよ。餘計な言葉は要りません……おゝ、何といふ美しい方でせう！　何といふ手でせう！（兩手に接吻する）

エレーナ　もう澤山です、それはあんまりです……出て下さい……（兩手を引き離す）あなたは前後を忘れたのです。

アーストロフ　言つて下さい、言つて下さい。さ、あしたどこで逢ひませう？（彼女の胴を抱へる）ね、これはどうしても避けられない事です。わたし達は逢はなきやならないんですよ。

接吻する。その時ヴイニーツキイ薔薇の花束を持つて登場。戸の傍に立ち止る。

伯父ワーニャ

エレーナ　（ヴイニーツキイを見ないで）　勘辨して……放して……（アーストロフの胸に顔をおしあてる）いけません！　（行かうとする）

アーストロフ　（彼女の胴を抱へたまゝ）　あした森へいらつしやい……二時に……ねえ？　ねえ？　來るでせう？

エレーナ　（ヴイニーツキイを見て）　放して下さい！　（烈しい困惑のさまで窓の方へ離れる）これはあんまりだ。

ヴイニーツキイ　（花束を椅子の上に放り出し、餌奮した樣子で顔と襟頸とをハンカチでふく）なんでもないさ……なに……なんでもないさ。

アーストロフ　（不貞腐つて）やあ、イワン・ペトローヴィッチ、今日は天氣も惡い方ぢやないね。朝の中は曇つてて、何だか雨にでもなりさうだつたが、今はもう日が出てゐる。正直なところ結構な秋になつたよ……冬蒔きも中々わるくないよ。（製圖を筒に卷き込む）だが、たゞ何だね、日が短

くなつたね……

浪場。

エレーナ　（いそいでヴイニーツキイに近寄り）あなたどうぞ骨折つて下さい、わたしたちが今日にもすぐこゝを立てるやうに、ぜひ出來るだけご盡力を願ひます！　よござんすか！　今日すぐですよ！

ヴイニーツキイ　（顏を拭きながら）　え？　いや、よろしい……Hélène（エレーン）　わたしはすつかり見ましたよ、すつかり……

エレーナ　（神經質に）ね、よござんすか？　わたし今日すぐこゝを立たなければならないんですから！

セレブリヤコーフ、ソーニヤ、チェレーギン、マリーナ登場。

チェレーギン　閣下、わたくしも矢張り體がどうもはつきり致しません。もう二日もぶらぶしてをりますやうな始末で。何ですか頭がその……

セレブリヤコーフ　ほかの者はどこにゐるのだ。わたしはこの家が嫌ひだ。まるで迷宮か何ぞのやうだ。途方もない大きな部屋が二十六もあつて、みんなすぐ方々へ散りぢりになつて了ふ。いつにもたれ一人目つかつたためしがない。（呼鈴をならす）こゝへマリヤ・ワシーリエヴナと、エレーナ・アンドレーヴナを呼びなさい！

エレーナ　わたしこゝにをります！

セレブリャコーフ　みなさん、どうぞおかけ下さい。

ソーニャ　（エレーナの方へ近づき、怯へかねた風に）あの方なんとおつしやつて？

エレーナ　あとで。

ソーニャ　あなた顫へてゐらつしやるんですの？　恐ろしくわく〳〵してゐらつしやるのね？（相手の顔を探るやうに見て）わかりましたわ……あの方は、もうこゝへ來ないつて仰しやつたんでせう……さうでせう？（間）ねえ！　さうでせうつてば。

エレーナうなづく。

セレブリャコーフ　（チェレーギンに）からだの工合が悪いのは、何にしてもまだ諦めやうがあるが、どうもこの田舍の生活ばかりは、とても消化し切れないよ。何だかまるでこの地球から、違つた星の世界へでも墜落したやうな感じがする。どうぞ皆さんおかけ下さい。ソーニャ！（ソーニャ父のいふことが耳に入らず、悲しさうにうなだれながら立つてゐる）ソーニャ！（間）聞えないな。（マリーナに）ばあや、お前もおかけ。（乳母腰をかけて靴下を編む）ところで、みなさんにお願ひしますが、どうかひとつ、その、注意の釘に耳をひつかけて貰ひたいもんですな。（笑ふ）

ヴイニーツキイ　（興奮の體で）わたしには多分用はないんでせうね？　行つてもいゝですか？

セレブリャコーフ　いゝや、君はこの際たれよりも一番必要なんだよ。

ヴイニーツキイ　一體あなたさまは、わたしにどんなご用がおありになるのでございます？

セレブリャコーフ　あなたさま……君は一たい何だつて腹を立ててゐるのだね？（間）もしわたしが君に對して何か悪い事でもしたのなら、どうか許して貰ひたい。

ヴイニーツキイ　そんな口の利き方はやめて貰ひたいですね。問題に入りませう……どんな用なんです。

マリヤ登場。

セレブリャコーフ　あ、丁度母も來ました。それでは皆さん、始めます。（間）諸君、今日わざわざ諸君をお招きしたのは他でもありません。當地へ檢察官が來るといふことですぞ。いや、冗談はさて置いて、眞面目な問題なのです。實はわざ〳〵お集りを願つたのは、皆さんのご援助とご助言を仰ぎたいからなのです。そして皆さんの日頃のご友情に甘えて、それをご承知下さる事と嘱望してゐる次第であります。わたしはご覽の通り學者で、書物の人間で、實際生活には極めて疎い方ですから、世情に通じた方々の助力なしには、到底やつて行けないのです。そこで例へばイワン・ペトローギッチとか、またそこにをられるイリヤー・イリイッチとか、お母さんとか、さういふ方々にお願したいのです……で、問題は、 mutet omnes una nox 即ち、われわれは皆神の下に在りでしてな、わたしは老人でもあり病人でもありますから、この際自分の一家族にかゝる限り、財産の整理をするには、最もその時機を得たものと考ふるのであります。わたしの

生涯は既に終りを告げてゐます。わたしは自分の事など考へてもゐない。が、わたしには若い妻もあれば、年頃の娘もあります。（間）この田舎に生活をつゞけて行く事は、わたしには不可能です。われわれは田舎住ひのために造られた人間ではありません。しかしこの領地から上るだけの財産で、都會に生活するといふことは不可能です。もし假りに森林を賣却するとしても、これは非常な手段であつて、毎年それを利用するわけに行きません。そこでわれわれは永續的に、多少なりとも一定した收入を保證するやうた、手段を講じなければならない譯です。ついては、かういふ方法を案出したので、一つみなさんのご熟考を煩したいのです。細目は避けて大體の概略だけを說明しますが、この領地は平均二步以上の利子を上げてゐない。そこでわたしはそれを賣却することを提議します。もし、それから得た金を有價證券の方へ向ければ、四步から五步までの利子を上げることになる。その上數千の剩餘金も出來る事と思ひますから、それでフィンランド邊にちよつとした別莊くらゐ買へるだらうと思ひます。

ヴイニーツキイ ちよつと待つて下さい……何だか耳が耄碌したやうだ。今の事をもう一度言つて見て下さい。

セレブリャコーフ 金を有價證券の方へ向けて、その剩餘金でフィンランドに別莊を買はう、と云ふのです。

ヴイニーツキイ フィンランドぢやない……まだ何かほかの事を云つたでせう。

セレブリャコーフ 領地を賣ることを提議してるんです。

ヴイニーツキイ そ、それだ。あなたはこの土地を賣るんですか。いや、結構なことだ。素敵な思ひつきですよ……しかし、この年をとつた母やソーニャやわたしに、どこへ身を置けと云ふんです。

セレブリャコーフ そんなことはその中に追ひ〳〵と決めるさ。さう一度には行かんからね。

ヴイニーツキイ 待つて下さい。今までわたしは常識と云ふものを、ひと滴も持つてゐなかつたらしい。今日が日までわたしは、馬鹿げた話だが、この土地をソーニャのものだと思つてゐましたよ。なくなつた父はこの土地を、妹の嫁入支度として買つたのです。今までわたしはあんまり單純だつた。法律を土耳古式でなくロシヤ風に解釋してゐたもんだから、領地は妹からソーニャに渡つたものと、から考へてゐましたよ。

セレブリャコーフ それは領地はソーニャのものだ。誰がそれを否定してゐます？　ソーニャの承諾がなければ、わたしだつて無暗に賣りはしない。しかもわたしはソーニャの利益のために、かういふ提議をしてるのぢやないか。

ヴイニーツキイ これは分らないぞ、いよ〳〵わからない！　一體わたしの氣がちがつたのか、それとも……それとも……

マリヤ ジャン、アレクサンドルに逆らふもんぢやありません。萬事まかして置きなさい。

どうしたらいゝか、又どうしたら悪いかといふことは、この人の方がわたしたちよりよく承知してゐなさるのだから。

ヴイニーツキイ　いや、まあ水を一杯もらはう。（水を飲む）　さあ、言ひたい事をお言ひなさい、言ひたいことを！

セレブリャコーフ　わたしはどうも分らん。一體なんだつて君は興奮してゐるのだね。わたしはこの計畫を理想的なものだと云つてゐやしない。もし皆さんがいけないと言はれゝば、敢て主張はしない。（間）

チェレーギン　（まごついて）閣下、わたくしは學問に對して、尊敬の念を抱いてゐるばかりではありません、何だかから、親しみのあるやうな感じさへするくらゐでございます。わたくしの兄弟のグリゴーリイ・イリイッチの妻の兄弟は――多分ご存じでもございませうが、コンスタンチン・トロフィーモヴッチ・ラケヂェモーノフと申しますが、學士でございまして……

ヴイニーツキイ　よせ、ワッフル、用談をしてゐるのだ……まあ、待て、あとにしろ……（セレブリャコーフに）まあ何なら、この男にでも訊いてごらんなさい。こゝの土地はこの男の叔父さんから買つたものだから。

セレブリャコーフ　いやはや、どうも、何だつてそんなことを訊く必要がある。何のためだ。馬鹿々々しい。

ヴイニーツキイ　この土地はその時分の相場で、九萬五千ルーブリ出して買つたものです。父はそのうち七萬ルーブリ拂つただけで、二萬五千ルーブリは借金になつてゐた。さあ、こゝのことをよく聞いて貰ひませう……もしわたしが心から愛してゐた妹のために、相續權を拒絶しなかつたら、この土地は買へなかつたのですぞ。そればかりではない。わたしは十年の間まるで牛のやうに働いて、借金をきれいに償却してしまつたのですぞ。

セレブリャコーフ　あゝ、こんな話を始めなけりやよかつた。

ヴイニーツキイ　たゞわたし一人の骨折りで、土地は綺麗に借金も拔け、家政の紊亂もなくて濟んだのだ。ところがどうだ、今わたしがこんな年寄になつてから、こゝを叩き出さうとしてゐるのだ！

セレブリャコーフ　君は一たい何を求めてゐるのか、わたしには譯がわからん！

ヴイニーツキイ　わたしは二十五年間この土地の差配をして、もつとも誠實な番頭として君に金を送つてゐたが、その間たゞの一度だつて、君はわたしに禮を云つたことがないぢやないか。わたしはいつも――若い時だつて今だつて――君から一年にわづか五百ルーブリの給料を貰つてゐるに過ぎない――まるで乞食の金ぢやないか！――しかも君は嘘にも一ルーブリだつて、增してやらうなんて考へた事はないのだ！

セレブリャコーフ　イワン・ペトローヴッチ、そんな事がわたしに分らう筈がないぢやないか？

わたしは實務の人ではないから、なんにも分らんのだ。君は幾らでも自分でいるだけ增したらよかつたのだ。

ヴイニーツキイ　なぜわたしは盗まなかつたのだらう？　みなさん、なぜわたしが盗みをしなかつたのを輕蔑しないんです？　その方が寧ろ正當だつたらう。さうすれば、わたしも今頃こんな乞食になつてゐなかつたらうに！

マリヤ　（嚴格に）ジャン！

チェレーギン　（はら〳〵しながら）これ、ワーニャ、ねえ、よしなさい、よしなさいつたら…わたしは身顫ひがするよ…何だつて仲のいゝ間柄をこはすのだ？　（接吻する）よしなさいよ。

ヴイニーツキイ　わたしは二十五年の間この母と一緒に、まるで土鼠のやうに壁の中に閉ぢこもつてゐたのだ…われわれの思想も感情も、みな君一人のものだつた。晝は君や君の仕事を話題とし、君を誇りとし、敬虔の情をもつて君の名前を發音してゐたものだ。夜は夜で――今でこそわたしはそんなものなんか馬鹿にし切つてゐるが――君の雜誌や本を讀んで時間を潰したものだ！

チェレーギン　よしなさいつたら、ワーニャ、よしなさい…わたしはもう聞いてをられん…

セレブリャコーフ　（憤然として）わたしには分らん、君はどうしろと云ふのだ。

ヴイニーツキイ　君はわたし達にとつて神様のやうなものだつた。わたし達は君の論文を暗

誦してゐたものだ…しかし、今こそわたしは眼が開いた！　わたしは何もかもすつかり分る！君は藝術を論じたが、藝術のことなんかちつとも分つてゐないのだ！　わたしが愛好してゐた君の著作は、びた一文の値打もないのだ！　君はわれわれをたぶらかしてゐたのだ！

セレブリャコーフ　みなさん。どうかこの人を取り鎭めて下さい、あんまりだ！　わたしは行きます！

エレーナ　イワン・ペトローヴィッチ、わたしは要求します、お默んなさい！　よござんすか！

ヴイニーツキイ　いや、默らん！　（セレブリャコーフの道を塞ぐ）　まて、わたしはまだ話が濟まないのだ！　君はわたしの生活を破壞してしまつた！　わたしの生活は生活ぢやない、あれが生活なものか！　君のおかげで、わたしは自分の生活の一番いゝ時代を、滅茶滅茶にしてしまつたのだ！　貴樣はおれのもつとも憎むべき仇だ！

チェレーギン　あゝ、たまらん…たまらん…わたしは行かう…

烈しい興奮の體で退場。

セレブリャコーフ　君はわたしにどうしろと言ふのだ？　それに全體なんの權利があつて、君はわたしにそんな言葉を使ふのだ？　やくざもの！　もし領地が君のものなら、勝手にとるがいい。わたしはそんなものなぞ欲しくない！

エレーナ　わたしいますぐこんな地獄から出て行きます！　（叫ぶ）　わたしもう我慢が出來な

い！

ヴイニーツキイ　おれの生涯は破滅した！　おれは天才のある賢い勇敢な人間だ……もしおれが順當に生活して來たら、ショーペンハウエルにもドストエーフスキイにもなれたかも知れない……おれは何を出鱈目いつてるんだらう！　氣がちがひさうだ……おつ母さん、わたしは絶望です！　おつ母さん！

マリヤ　（いかつい調子で）　アレクサンドルの云ふことをお聞きなさい！

ソーニャ　（乳母の前に膝をつき、しがみつく）　ばあや！　ばあや！

ヴイニーツキイ　おつ母さん！　わたしはどうしたらいゝんです？　いや、いゝです、何も言はないで下さい！　わたしは自分のなすべきことを、ちやんと自分で知つてゐる！　（セレブリヤコーフに）　覺えてゐろ！

中央の戸口から退場。マリヤ泣いて退場。

セレブリヤコーフ　諸君、これは一體どうしたといふのだ、あんまりぢやないか。あの氣ちがひをわたしの目に見えない所へ連れて行つてくれ！　わたしはあの男と一つ屋根の下に住むことは出來ん！　そこにゐるのだ。（中央の戸口を指して）まるで並んで暮してゐるやうなものだ……村の方が離れへでも引つ越さしてくれ。でなければ、わたしがこゝから出て行く。あんな男と一つ家に寢泊りは出來ん……

エレーナ　（実に）　わたしたちは今日こゝを立ちませう！　今すぐさう吩咐けなければなりません。

セレブリヤコーフ　ろくでなしめ！

ソーニャ　（跪いたまゝ父に向ひ、神經的に涙聲で）　お父さま、どうか優しい心持をもつて下さいな！　わたしもワーニャ伯父さんも、そりや不仕合せなんですもの！　（絶望を押し泳へながら）　やさしい心持になつて下さいな！　お父さま覺えてゐらつしやるでせう、あなたがもつとお若かつた時、ワーニャ伯父さんとお祖母さまは、毎晩あなたのためにご本を飜譯したり、原稿を書きかへたりしました……毎晩々々夜の眠も寢ずに！　わたしとワーニャ伯父さんは休む暇もなしに働いて、一文だつて自分たちのために、無駄づかひしないやうにと心配して、みんなあなたにお送りしたんですのよ……わたしたちは、たゞでパンを頂いてゐたのぢやないことよ！　あら、どうしませう、わたし見當ちがひなことばかり言つて。でもね、お父さま、わたしたちの心持は分つて下さらなければなりませんわ。優しくして下さらなければなりませんわ！

エレーナ　（興奮して、実に）　アレクサンドル、どうぞあの人とよく分るやうに話し合つて下さいな……お願ひですから。

セレブリヤコーフ　よし、よし、よく話し合つて見よう……わたしは何もあの男を咎めはしない、腹なんか立てやしない。だがね、考へてもご覽、あの男の擧動は少くとも變だらう。ぢや宜

しい、わたしはちよつと行つて來るから。

中央の戸口から退場。

エレーナ　なるべく穩かにして、あの人の心持を落ちつかせて下さいな…

彼につゞいて退場。

ソーニャ　（乳母にひしと身を寄せて）ばあや！　ばあや！

マリーナ　何でもありませんよ、お孃さん。鷺鳥どもは少しぎやあ〳〵騒いだら、すぐやめてしまひますよ…少しぎやあ〳〵云つたら、すぐやめてしまひますよ…

ソーニャ　ばあや！

マリーナ　（その頭を撫でて）まあ、まるで寒い時かなんぞのやうに、ぶる〳〵慄へて！　おゝ、おかあいさうに、神さまはお惠み深うございますよ。菩提樹のお茶をあげませうか、それとも木苺か、さうすればすぐ直つて了ひますよ…そんなにくよ〳〵するもんぢやありません。ねえ、おかあいさうに…腹立たしげに中央の戸口を見て）あれ、まあ、鷺鳥どもが騒ぎ出したこと、ろくな事はありやしないんだから！

舞臺のうしろで拳銃の音。エレーナの悲鳴が聞える。ソーニャびくりと慄へ上がる。

マリーナ　えゝまあ、何と云ふざまだ！

セレブリャコーフ　（恐怖のためによろ〳〵しながら駈け込む）とめてくれ！　あいつを留めてくれ！

氣がちがつた！

エレーナとヴイニーツキイ戸口で爭ふ。

エレーナ　（拳銃をもぎ取らうとあせりながら）およしなさい、およしなさいつてば！

ヴイニーツキイ　放してくれ、エレーン！　放してくれ！　（體を振りほどいて駈け入り、きよろきよろ〳〵セレブリャコーフをさがす）どこへ行つた、あいつ？　あゝ、そこにゐるな！　（彼をめがけて發射する）おのれ！　（間）だめか？　またしくじつたか？　（憤怒の聲で）ちつ、ちつ…畜生…（拳銃を床の上になげつけ、ぐたりと椅子に腰をおろす。セレブリャコーフ荒膽を拉がれてぼんやりしてゐる。エレーナは壁に凭り騒り、失神したやうになる）

エレーナ　わたしをこゝからつれて行つて下さい。つれて行つて下さい。殺して下さい…わたしこゝにゐることは出來ません、出來ません！

ヴイニーツキイ　おゝ、おれは何をしてゐるのだ！　何をしてゐるのだ！

ソーニャ　（小聲に）ばあや！　ばあや！

――幕――

第四幕

ヴイニーツキイの部屋。寢室と領地の事務室を兼ねてゐる。窓の傍には出納簿やいろ〳〵の書類をのせた大卓、事務卓、戸棚、衝などが並んでゐる。アーストロフの使用料としてやゝ小形の卓がある。その上には製圖用具、繪具などがのつてゐり、傍には紙挾みが置いてある。椋鳥を入れた鳥籠。壁の上には明かに誰にも用のなささうな、アフリカの地圖が掛つてゐる。模造皮を張つた大きな長椅子。左手には内部の部屋々々へ通ずる戸口、右手には玄關へ通ずる扉がある。右手の扉の傍には、百姓達が汚くしないやうに、大きな靴ぬぐひが敷いてある。――秋の晩。靜寂。

チェレーギンとマリーナの二人、向ひ合つて靴下の毛絲を捲いてゐる。

チェレーギン　さあ、早くしておくれよ、マリーナ・チモフェーヴナ。でないと、すぐお暇乞ひに呼ばれるから。もう馬車はさう云つてあるんだからね。

マリーナ　（早く捲かうと努めながら）もう少しつきや殘つてゐないよ。

チェレーギン　ハリコフへおいでになるんだとさ。あつちでお住ひになるんだらう。

マリーナ　その方がいゝともさ。

チェレーギン　何しろ吃驚なすつたんだね……エレーナ・アンドレーヴナは、『一時間だつてこんな所にゐるのはいやです……立ちませう、さあ、立ちませう……ハリコフで暮しませう。少し

落ち着いた上で、荷物を取りに人を寄越しませう……』とかう仰しやるんだ。それで身輕でお立ちになるんだよ。ねえ、マリーナ・チモフェーヴナ、あの人もこゝで暮すやうな廻り合せになつてゐなかつたんだね。さう云ふ廻り合せになつてゐなかつたのさ……これも前世の約束ごとだよ。

マリーナ　その方がいゝともさ。さつきの騷ぎつたらないよ。拳銃沙汰までして……いゝ恥さらしな。

チェレーギン　全くね。アイヴゾーフスキイ（海洋畫家として著名）にでも描かせるといゝ畫題だよ。

マリーナ　まあ、二度と見たくないものさ。（間）これでまた昔どほりに暮せる譯だ。朝の七時にはお茶、十二時にはお晝、晩には夕飯に坐る、萬事人さまのするやうに……基督教の信者なみにきちゝやつて行けますよ。（溜息をつく）わたしはもう久しいこと好物の素麵を食べなかつたよ。

チェレーギン　さう〳〵。全く久しいこと素麵をこしらへなかつたつけ。（間）久しいもんだ……今朝ね、マリーナ・チモフェーヴナ、わしが村を歩いてゐると、ある店の奴がわしのうしろから、『やい、貴樣は居候ぢやねえか！』と云ふぢやないか。わしも辛くなつてね！

マリーナ　そんなこと氣にかけなさんなよ。わたし達はみんな神さまの居候だもの。お前さんだつて、ソーニャさんだつて、イワン・ペトローギッチだつて――仕事をしないでじつと坐つてゐるものは一人もゐないよ。みんな働いてゐるんだよ！……みんな……ソーニャさんはどこだらう

ねえ？

チェレーギン　庭だよ。しきりにドクトルと歩きまはつて、イワン・ペトローヴィッチを探してゐるんだよ。ひよつと自害でもするといけないつて心配してね。

マリーナ　拳銃はどこへやつたの？

チェレーギン　（そつと囁く）わしが穴藏へかくしたよ。

マリーナ　（薄笑ひする）罪なことだ！

（ヴイニーツキイとアーストロフ、外庭から登場。）

ヴイニーツキイ　うつちやつといてくれ。（マリーナとチェレーギンに）こゝを出て行つてくれ。せめて一時間だけでも、わたしを一人で置いてくれたつていゝだらう！　そんなに後見されてちやたまつたもんぢやない。

チェレーギン　すぐ行くよ、ワーニャ。

（爪先立ちで退場。）

マリーナ　（毛糸をかき集めて退場。）鶏鳥が鳴いてるよ、があ、があ、があつて！

ヴイニーツキイ　うつちやつといてくれ給へ！

アーストロフ　それはこつちも望むところなんだよ。僕はもうとつくにこゝを立たなけりやならない筈だつたのさ。だがね、何度も云ふ通り、君が僕のとこから取つたものを、返してくれないうちは立てないぢやないか。

ヴイニーツキイ　僕は何もとりやしないよ。

アーストロフ　冗談ぢやないよ――そんなに引き止めないでくれ給へ。もうとつくに立つ時間が來てるんだから。

ヴイニーツキイ　僕は何もとりやしないと言ふのに。（兩人腰をかける）

アーストロフ　とらないつて？　仕方がない、ぢやもう少し待つてやらう。その上はもう失敬だが、腕力に訴へるやうな事になるかも知れないよ。君を縛つた上でさがすんだ。全く冗談に云つてるんぢやないよ。

ヴイニーツキイ　好きなやうにするさ。（間）あゝ、間抜けなことをやつてしまつた。二度も撃つて一度もあたらないなんて！　僕は自分ながら愛想がつきた！

アーストロフ　ぽん〳〵撃ちたくなつたのなら、いつその事、自分の額をぶち抜いたらよかつたのさ。

ヴイニーツキイ　（肩を竦めて）變だなあ。僕は人殺しを企てたのに、捕縛もしなければ告發もしない。ははあ、おれを氣ちがひ扱ひにしてゐるんだな。（意地惡い笑ひ）ふん、おれが氣ちがひで、教授とか大學者とかいふ假面を被つて、自己の無能や鈍感や、明々白々な無情酷薄を隱してゐる

人間が氣ちがひでないのか。年寄りと結婚して、みんなの眼の前で夫を欺いてゐる人間が氣ちがひでないのか。僕は見たぞ。君があの女を抱いてる所を、ちやんと見て知つてるぞ！

アーストロフ　如何にもさやう。たしかに抱いてござりますわい。ところで君はこれさ。（鼻を押へて見せる）（馬鹿を見たといふ意――譯者）

ヴイニーツキイ　（扉の方を見ながら）　えゝつ、君等のやうな人間を養つてゐる、この地球が氣ちがひなのだ！

アーストロフ　なんだ、馬鹿々々しい。

ヴイニーツキイ　仕方がないよ、僕は氣ちがひなんだから、從つて責任もない譯だよ。僕は馬鹿々々しいことを云ふ權利があるんだ。

アーストロフ　古い洒落だ、君は氣ちがひぢやないよ。だが、たゞ變人だね。仕方のない道化だよ。僕は以前變人といふものはみんな病人か、アブノーマルの奴だとばかし思つてゐたが、今ぢや、人間のノーマルな狀態は卽ち變人なり、といふ意見だ。君は完全にノーマルな人間だね。

ヴイニーツキイ　（手で顏をかくす）　あゝ、恥かしい！　僕がどんなに恥かしい思ひをしてるか、君にはとても分らないだらう！　この刺すやうな羞恥の感情は、どんな痛みにも比べられやしない。（惱ましげに）あゝ、たまらない！　（卓に寄りかゝる）どうしたらいゝのだ？　どうしたらいゝのだ？

アーストロフ　どうにも仕樣がないね。

ヴイニーツキイ　何とかしてくれ！　あゝ、どうしよう……僕は四十七だ。もし六十まで生きのびるとすれば、まだあと十三年ある。長いなあ！　この十三年を僕はどうして暮して行かう？　僕はどうしたらいゝのだらう、その長い年月を何で埋めて行つたらいゝのだらう？　あゝ君……（アーストロフの手を痙攣的に握りしめる）ねえ君、もしこの餘生を、何か新しい方法で暮すことが出來たらなあ。晴やかな靜かな朝ふと目を醒して、『おれは新たに生活をやり直したのだ。過去の事は一切忘れられて了つた、煙のやうに消え去つてしまつた、』とか感じることが出來たら、どんなにいゝだらう。（泣く）新しい生活を始める……ねえ、君、一體どう始めたらいゝのだらう……何から始めたらいゝのだらう、教へてくれ……

アーストロフ　（忌々しさうに）君は仕樣のない男だなあ。新しい生活なんぞあつて堪るものか。君にしたつて、僕にしたつてさうだ、お互に希望なんかありやしない。

ヴイニーツキイ　さうかね。

アーストロフ　それは僕が保證する。

ヴイニーツキイ　何とかしてくれ……（心臟の上を指しながら）こゝが燒きつくやうだ。

アーストロフ　（腹立たしげに呶鳴りつける）よしたまへ！　（優しくなつて）　今から百年二百年の後、この世に生活する人達は、われわれが自分の生活をかくも馬鹿々々しく、かくも殺風景に送つた

のを輕蔑するだらう。さういふ人達は、或ひは幸福になり得る方法を發見するかも知れない。が、併しわれわれは……われわれはお互ひにたつた一つの希望をもつてゐる。その希望といふのは他でもない、自分達が棺の中に眠つたとき、幻――それも恐らく愉快な幻が、訪れてくるだらうと云ふことだ。（溜息をついて）ねえ、君、この郡内で教養のある人間らしい人間と云つたら、たつた二人きりしかゐなかつた。それは君と僕だ。併し十年かそこいらの中に、平凡な生活が――下劣で俗惡な生活が、われわれを泥沼の中へ引きずり込んでしまつた。生活はその腐つた汗で、われわれの血を穢してしまつた。そしてわれわれは、すべての人間と同じやうな凡俗になり切つたのだ。（口早に）だが、こんなことで胡麻化されてはならんぞ。君、僕のとこから取つたものを返してくれたまへ。

ヴイニーツキイ　僕は何もとりやしないと言ふのに。

アーストロフ　君は僕の旅行用の藥箱から、モルヒネをいれた小壜をとつたのだ。（間）いゝかね、もし君がどうあつても、自分の始末をつけてしまひたいと言ふのなら、森へ行つて一發やりたまへ。そしてモルヒネは返してくれ。さうでないと、いろんな噂や臆測が堪らないから。世間の人は僕がわざとやつたやうに考へるよ……僕はいづれ君の解剖をしなければならん、それだけでも澤山だらうぢやないか……君はそんなことが面白いと思つてゐるのかね？

ソーニャ登場。

ヴイニーツキイ　うつちやつといてくれ。

アーストロフ　（ソーニャに）ソフィヤ・アレクサンドロヴナ、あなたの伯父さんはわたしの藥箱から、モルヒネを入れた壜をとつて返してくれないんですよ。ねえ、さう言つてあげて下さい、そんなことは……第一あんまり利口ぢやないつて。それにわたしは暇がないのです。もう立たなきやならないんですからね。

ソーニャ　ワーニャ伯父さん、あなたモルヒネをお取りになつたの？（間）

アーストロフ　とつたんですよ。それはわたしが保證します。

ソーニャ　お出しなさい。なぜあなたはわたし達を脅かしてばかりゐらつしやるの？（憂しく）出して下さいね、ワーニャ伯父さん！　わたしだつてあなたに劣らない程、不仕合せなのかも知れないわ。でも、わたしやけになつたりなんかしません。自分の生活がひとりでにお終ひになるまで、わたしじつと怺へてゐますわ……あなたも我慢なさいね。（間）出して下さいな！（彼の手に接吻する）ねえ、伯父さんは優しい親切ないゝ人でせう。ね、出して下さいな！（泣く）伯父さんはいゝ人なんですもの、わたし達を可哀さうだと思つて出して下さるわねえ。我慢なさいね、伯父さん！　我慢なさいね！

ヴイニーツキイ　（卓から壜を取り出してアーストロフに渡す）さ、持つて行き給へ！（ソーニャに）だが、早く仕事にかゝらなくちやならん。早く何かしないと、とてもたまらん……たまらん……

ソーニャ　えゝ、えゝ、働くんですわ。皆さんがお立ちになるのを見送つたら、すぐお仕事にかゝりませうね……（神經的に卓の上の書類を擇り分ける）何もかも打つちやらかしになつてしまつたわ。

アーストロフ　（壜を藥箱にしまつて革帶を緊める）さあ、これでいよ〳〵歸れる。

エレーナ登場。

エレーナ　イワン・ペトローヴィッチ、あなたこゝにゐらしたの？　わたしたちはすぐ立ちますわ。どうかアレクサンドルの所へいらして下さいな。何ですかあなたに申したいさうですから。

ソーニャ　いつてらつしやい、ワーニャ伯父さん。（ダイニーツキイの手をとる）さ、參りませう。お父さまとあなたは、ぜひ仲直りなさらなきやなりませんわ、それは大切なことですわ。

ソーニャ、ダイニーツキイ退場。

エレーナ　わたしこれから立ちます。（アーストロフに手を差し出す）さよなら。

アーストロフ　もうですか？

エレーナ　もう馬車の用意が出來ましたから。

アーストロフ　さよなら。

エレーナ　あなたは今日こゝを立つやうに、お約束なさいましたわね。

アーストロフ　覺えてゐます。すぐ立ちます。（間）　びつくりしましたか？（彼女の手をとる）あんな事がそんなに怖いものでせうかねえ？

エレーナ　えゝ。

アーストロフ　それともこの儘こゝにをられますか！　え？　あす森の中で……

エレーナ　いゝえ……もう決りました……もう出發と決りましたからこそ、かうやつて大膽にあなたの顏を見ることが出來るのですわ……わたしたつた一つお願ひがありますの、どうぞわたしの事をもつとよく思つて下さいませんか。わたしはあなたに尊敬して頂きたいのでございます。

アーストロフ　えゝつ！（じれつたさうな身振り）この儘こゝにゐらつしやい。お願ひですよ。ねえ、あなたはこの世で何もすることはないのでせう。あなたの一生は何の目的もないのです。何一つあなたの注意を獨占するやうなものはないのです。ですから、晩かれ早かれ何れにしろ、あなたは感情に負かされてしまふのです――これは避け得られない事です。さうだとすれば、ハリコフやクールスクなんかより、こゝで自然の懷に抱かれながらさうなつた方が、どんなにいゝか知れませんよ……少くとも詩的です。むしろ非常に美しいくらゐです……こゝには森もあるし、ツルゲーネフ趣味の半分こはれかゝつた地主邸もありますよ……

エレーナ　まあ、あなたは何て可笑しな方でせう……わたしあなたには腹を立ててゐますのよ。でも、それでも……あなたのことは心持よく思ひ出すでせう。あなたは面白い變つた方ですのね。もうわたし達は二度とお目にかゝる事もないでせう。ですから――何をかくしませう、實

はわたしあなたには少し迷ひ込んだくらゐなんですの。さあ、お互に手を握り合ひませう。そして友達としてお別れしませう。悪くお思ひにならないで下さいね。

アーストロフ　（手を握る）　ではもう立つて下さい……（物思はしげに）どうやらあなたは善良な實意のある人らしいが、しかし何だかあなたのからだ全體には、何かかう不思議な所があるやうですね。だつて、あなたがご良人と一緒にこゝへ來られると、今まで働いたり、忙しさうに馳け廻つたり、何か造つたりしてゐた人達が、みんな自分の仕事を抛り出して了つて、まるひと夏といふもの、ご良人の足痛風とあなたのことに、掛り切りにならなきやならなくなつたんですものね。あの人もあなたもお二人とも、自分の怠慢病をわれわれ一同に、すつかり傳染させてしまつたのです。わたしも夢中に取りのぼせて了つて、まるひと月といふもの何一つしなかつたのです。その間に世間の人達は病氣をする。わたしの森や苗木畑では、百姓共が畜類を放し飼ひにする……かう云ふ風で、あなた方ご夫婦は、どこへ行かれるにしたところで、到るところに破壞の種を持つていらつしやるんですね……勿論これは冗談ですが、とにかく……不思議だ。もしあなたがこゝに殘つてをられたら、それこそ、どえらい破壞が持ち上つたに違ひない、わたしはさう信じますね。わたしも破滅して了へば、あなた方にも……まあいゝ事はなかつたでせうな。さあ、お立ちなさい。Finita la comedia!（喜劇は終つた！）

エレーナ　（彼の卓の上から鉛筆をとり、手早く隠す）この鉛筆はわたし記念に頂いておきますわ。

アーストロフ　どうも不思議ですね……あんなに親しくして頂いてをつたものが、急になぜだか……もう二度と逢はないんですからね。これがまあ浮世ですかね……こゝに誰もゐないうちに、ワーニャ伯父さんが花束を持つて入つて來ないうちに、どうぞ……キッスをさせて下さい……お別れに……いゝでせう？（彼女の頬に接吻する）さあ……これでいゝ。

エレーナ　どうぞご機嫌よう。（あたりを見廻して）構やしない。一生に一度だわ！（激しく彼を抱く、兩人すぐ急いで離れる）もう立たなければなりません。

アーストロフ　早くお立ちなさい。馬の用意が出來たのでしたら、もうお出掛けなさい。

エレーナ　誰か來るやうですわ。（下人聞き耳を立てる）

アーストロフ　Finita!（お終ひだ！）

セレブリイコーフ、ヴィニーツキイ、書物を持つたマリヤ、チエレーギン、ソーニャ登場。

セレブリャコーフ　（ヴィニーツキイに）古いことを言ひ出すものは鬼になれだよ。あの事があつてからこの四五時間のうちに、わたしは多くの體驗を得たし、また隨分いろんな事を考へもした。如何にして生くべきかといふ問題について、後世への教訓として立派な論文が書けさうなくらゐだ。わたしは喜んで君の謝辭を納れるし、またわたしからも君にお詫びします。では、さやうなら！（ヴィニーツキイに三度接吻する）

ヴィニーツキイ　わたしは以前おくつてゐたと同じだけの額を、今後もやはり正確にお送り

します。萬事むかし通りに行きませう。

エレーナ、ソーニャを抱く。

セレブリャコーフ　（マリヤの手に接吻する）お母さん…

マリヤ　（接吻しながら）アレクサンドル、また寫眞を撮つて送つて下さいよ。あなたがわたしにとつてどんなに大切な人だか、よくご存じでせう。

チェレーギン　閣下、ご機嫌よろしう！　どうぞ今後ともお忘れなく！

セレブリャコーフ　（娘に接吻して）さやうなら…みなさん、さやうなら！（アーストロフに手を差し伸べながら）どうも大變愉快に交際して頂いてあり難う…わたしはあなたの眞劍な要求や努力を尊敬してをります。しかし、どうかこの老人のお別れのご挨拶として、たゞ一つだけ注意を申し述べることを許して下さい。みなさん、仕事をしなければなりませんぞ！

退場。續いてマリヤとソーニャ退場。

ヴイニーツキイ　（エレーナの手を強く接吻する）さよなら…許して下さい…もう一生お目にかかりますまい。

エレーナ　（感動して）さよなら、ワーニャ。

彼の頭に接吻して退場。

アーストロフ　（チェレーギンに）ワッフル、あそこへ行つてな、ついでに、僕の馬車も一緒に廻しとくやうに、さう云つてくれないか。

チェレーギン　あゝあゝ、いゝとも。

退場。アーストロフとヴイニーツキイの二人だけ殘る。

アーストロフ　（卓の上の繪具を片づけて鞄の中にしまふ）なぜ君は見送りに行かないんだね？

ヴイニーツキイ　勝手に立たせるがいゝ、僕は…僕はとてもそんなことなんか出來ない。苦しい。早く何かで氣を紛らさなけりや…仕事だ、仕事だ！（卓の上の書類をかきまはす）

間。鈴の音聞える。

アーストロフ　行つちやつた。たぶん教授は喜んでゐるだらう。もうどんな餌でも、先生を二度とこゝへおびき寄せることは出來まいて。

マリーナ登場。

マリーナ　お立ちになりましたよ。（安樂椅子に腰をかけて靴下を編む）

ソーニャ　（登場）お立ちになつてよ。（眼を拭く）どうかご無事でいらつしやるやうに。（伯父に）さあ、ワーニャ伯父さん、何かしませう。

ヴイニーツキイ　働くんだ。働くんだ…

ソーニャ　わたし達が一緒にこの卓に坐るのも隨分久しぶりねえ。（卓子の上のランプに火をつける）

インクがないらしいわ……（インク壺を取つて戸棚の傍へ行き、インクをいれる）わたし淋しいわ。お二人が立つておしまひになつたんですもの。

マリヤ　（ゆる〳〵登場）いつて了つた！（腰をかけて讀書に耽る）

ソーニャ　（卓子に向つて、帳簿をめくる）ワーニャ伯父さん、一番さきに勘定書から始めませうよ。隨分なげやりになつてゐるわ。今日ね、また勘定書をとりに來たのよ。さあお書きなさい。あなたはこつちの方を書いて下さいね、わたしもう一つの方をしますから……

ヴイニーツキイ　（書く）『記……一つ……』（兩人默つて書く）

マリーナ　（あくびをする）あゝ、眠くなつて來た……

アーストロフ　靜かだなあ。ペンの軋る音と、こほろぎの鳴き聲だけだ。あつたかくつていい心持だ。こゝから立つて行くのが厭になつてきたよ。（鈴の音が聞える）さあ、馬車が廻つたぞ……それでは皆さん、あとはもうあなた方とこの卓子にお別れして、馬車を飛ばせるだけだ！（製圖を紙挾みの中にしまふ）

マリーナ　なにもそんなに慌てなくつたつていゝでせう？　まあ、ゆつくりしておいでなさいよ。

アーストロフ　馭目なんだよ。

ヴイニーツキイ　（書く）『先分の未拂金二ルーブリ七十五』……

（下男登場。）

下男　ミハイル・リヴーギッチ、馬車を廻しました。

アーストロフ　聞えたよ。（下男に藥箱と鞄と紙筒を渡す）さ、これをとつてくれ、紙挾みを潰さないやうに氣をつけておくれよ。

下男　へえ。（退場）

アーストロフ　それではと……（暇乞ひに行く）

ソーニャ　今度はいつお目にかゝれませう？

アーストロフ　さあ、來年の夏より早くなることはありますまい。この冬はあぶないものですなあ……勿論、何か起つたらお知らせ下さい――すぐ參ります。（握手する）どうもご馳走になつたり、ご親切にして頂いたり……いろ〳〵有難う存じました。（乳母の方へ近づきその頭に接吻する）さよなら、ばあや。

マリーナ　それでは、お茶も上らずにお立ちでございますか？

アーストロフ　ほしくないよ、ばあや。

マリーナ　ではヲートカでも上つたら？

アーストロフ　（煮え切らずに）ぢやあ、さうするかね……

（マリーナ退場。）

アーストロフ　（間をおいて）わき馬の奴が何だかびつこを引いてるんだ。昨日ペトルーシカが水を飲ませに行くときから、もう氣がついたんだがね。

ヴイニーツキイ　蹄鐵をとり替へなきや。

アーストロフ　こいつはロヂェストゼンノエ村で、鍛冶屋へ寄つて行かなければなるまい。どうもやむを得んやうだ。（アフリカの地圖に近づいてじつと見る）これでアフリカなんぞは、きつと今頃は燒けるやうな暑さだらうな――恐ろしい事だ！

ヴイニーツキイ　あゝ、そればさうだらう。

マリーナ　（火酒の杯とパンを一片のせた盆を持つて登場）　さあ、召し上れ。

アーストロフ、火酒を飲む。

マリーナ　旦那、よろしく召し上れ。（低く頭を下げる）　あなた、パンもちつと召し上つたら。

アーストロフ　いや、これでいゝ……ではご機嫌よう！（マリーナに）送らなくてもいゝよ、ばあや。いゝよ。

退場。ソーニャ見送のため、蠟燭をもつて續いて退場。マリーナ安樂椅子に腰をかける。

ヴイニーツキイ　（書く）『二月二日、精進油二十ポンド……二月十六日、同じく精進油二十ポンド……輾割蕎麥……』（間）

鈴の音が聞える。

マリーナ　あ、お立ちだ。

間。

ソーニャ　（跳つて來て卓の上　蠟燭をおく）お立ちになつてよ……

ヴイニーツキイ　（繁盤をはじいて書きつけろ）合計十五……二十五……

ソーニャ腰をかけて書く。

マリーナ　（あくびをする）　基督さま、どうぞお救しを……

チェレーギン、爪先立ちで登場。扉の傍に腰をおろして、そつとギターの調子を合せる。

ヴイニーツキイ　（ソーニャの髪の毛を撫でて）ソーニャ、わたしは苦しい！　あゝ、わたしがどんなに苦しいか、これがお前に分つたらなあ！

ソーニャ　仕方がありません、生きて行かなければなりませんわ！（間）ねえ、ワーニャ伯父さん、生きて行きませうね。長い長い日と長い長い夜を、どこまでも暮して行きませう。運命がわたし達に下した試みを、じつと怺へて行きませう。今も、年を取つてからも、休むことなく他人のために働いて行きませう。そしてわたし達の時が來たとき、素直に死んで行きませう。そしてお墓の向うへ行つたら、わたし達がこの世で苦しんだことや、泣いたことや、辛かつたことを申し上げませう。そしたら神さまだつて、可哀さうだと思つて下さるでせうよ。その時こそわたし達は、ねえ伯父さん、明るい、美しい、優美な生活を見ることが出來ますわ。この世の不幸さへ

も感激と微笑をもつて、振り返つて見ることが出來ますわ――そしてゆつくり休めるでせうよ。わたし信じてゐます。伯父さん、わたしそれは燃えるやうに、熱心に信じてゐますわ……（伯父の前に跪いてその膝に頭をのせ、疲れ切つた聲で）わたし達はゆつくり休めるでせう！

チェレーギンそつとギターを彈く。

ソーニヤ ゆつくり休めるでせう！　わたし達は天使の聲を聽くんですわ。そして空一めん寶石を鏤めたやうに輝くのを見るんですわ。ありとあらゆる地上の惡も、ありとあらゆる人間の苦しみも、全世界を充たす大慈悲の中に溶け込んで行くのを見るんですわ。そしてわたし達の生活は、まるで撫でられてでもゐるやうに、靜かな、柔い、甘い生活になるんですわ……（ハンカチで伯父の涙を拭いてやる）お可哀さうに、お可哀さうにねえ、ワーニヤ伯父さん、あなた泣いてゐらつしやるの……（涙ぐみながら）あなたはこれまで一度も、幸福といふものをご存じなかつたわねえ。でも、もう少しよ、ワーニヤ伯父さん、もう少しお待ちなさいね……わたし達はゆつくり休めるでせう……（抱く）ゆつくり休めるでせうよ！

伯父ワーニヤ

夜番が拍子木を鳴らす。

チェレーギン靜かに彈く。マリヤはパンフレットの餘白に何やら書き込み、マリーナは靴下を編んでゐる。

ソーニヤ ゆつくり休めるでせうよ！

――靜かに幕――

伯父ワーニヤ ★

定價二十錢

昭和二年七月五日印刷
昭和二年七月十日發行

譯者　米川正夫

發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄

印刷者　東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目　菊地眞次郎

株式會社秀英舍印刷

岩波文庫 88

發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話九段二一〇九番
振替東京二六二四〇番

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波書店

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫はこの要求に應じそれに勵まされて生れた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近來流行の大量出版物を見るに、或は唯廣告と宣傳とに力を專らにして、その內容に至つては杜撰到底眞面目なる人々の渴望を滿足し得ることなく、或は豫約の手段によつて讀者を制限するとともに讀者を繫縛し、徒らに學藝解放の美名を僭するに過ぎないのがつねである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒としてその達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫

□此文庫は、普及を第一義として刊行する學生用、携帶用の廉價版です。

□**內容の厳選**　古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、飜譯に於ても最善を期します。

□**最低の廉價**　出來る丈安く手に入れられる樣に、小さい形の中に、澤山の內容を盛る形式を採りました。

□**購求の自由**　しかも讀者が全く自由に、欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を執りました。

□方法は、範を廣く內外に覓めたる結果、最合理的普及版たる獨のレクラムを則りました。

□編次はたゞ發行順に從つて之を追ふものであります。

□約百頁を單位として星一つを以てそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。

□★一つづゝを以て此の文庫の番號を數へます。

□★★或は★★★★★は、それぞれ二百頁或は五百頁の本一册なる事を示し、百頁のもの二册或は五册ではないのです。★七つ位迄は一册に纏まるつもりです。

□送料(及定價)は左表によります。

★	定價二十錢送料二錢
★★	四十錢〜四錢
★★★	六十錢〜四錢
★★★★	八十錢〜六錢
★★★★★	一円〜六錢
★★★★★★	一円二十錢〜八錢
★★★★★★★	一円四十錢〜八錢

1—7 新訓 萬葉集 佐佐木信綱編 ★★★★★★★

8—9 こゝろ 夏目漱石著 ★★

10 プラソクラテスの辯明 トンクリトン 久保勉 阿部次郎譯 ★

11—12 カント 實踐理性批判 波多野精一 宮本和吉譯 ★★

13 古事記 幸田成友校訂 ★★

14—15 藤村詩抄 島崎藤村自選 ★★

16—2 スミス 國富論 上卷 氣賀勘重譯 ★★★★

2—31 (未刊)

32 にごりえ たけくらべ 樋口一葉著 ★

33 國姓爺合戰 近松門左衛門作 鑑の權三重帷子 和田萬吉校訂 ★

34—38 戰爭と平和第一卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★★★★

39—55 (未刊)

56—58 芭蕉七部集 伊藤松宇壹訂 ★★★

59 五重塔 幸田露伴著 ★

60—61 病牀六尺 正岡子規著 ★★

62 父 ストリントベルク作 小宮豐隆譯 ★

63—64 出家とその弟子 倉田百三著 ★★

65 櫻の園 チエーホフ作 米川正夫譯 ★

66—67 幸福者 武者小路實篤著 ★★

68 號外 他六篇 國木田獨步著 ★

69—70 科學の價値 ポアンカレ著 田邊平譯 ★★

71—73 認識の對象 リツグルト著 山内得立譯 ★★★

74 おらが春 一茶作 荻原井泉水校訂 ★

75—76 北村透谷集 島崎藤村編 ★★

77—78 賢者ナータン レッシング作 大庭米治郎譯 ★★

79 春の目ざめ ヴェデキント作 野上豊一郎譯 ★

80 令嬢ユリー ストリントベルク作 茅野蕭々譯 ★

81 會我會稽山心中天の網島 近松門左衛門作 和田萬吉校訂 ★

82 闇の力 トルストイ作 米川正夫譯 ★

83—84 仰臥漫錄 正岡子規著 ★★

85—87 科學と方法 ポアンカレ著 吉田洋一譯 ★★★

88 伯父ワーニヤ チエーホフ作 米川正夫譯 ★

89 生ける屍 トルストイ作 米川正夫譯 ★

以下近く刊行の豫定

カント純粹理性批判 上卷 天野貞祐譯

カントプロレゴーメナ 天野貞祐譯

シユライエルマツヘル宗教論 石原謙譯

ギンデルバント哲學とは何か イマヌエル・カント 河東涓譯

福澤選集 福澤諭吉著

日本經濟史論 福田德三著

綱島梁川集 安倍能成編

種の起原 ダーウヰン著 小泉丹譯

ダーウヰンの自傳及其追憶 F・ダーウヰン著 小泉丹譯

クロポトキン相互扶助論

俗樂旋律考 上原六四郎著

源氏物語

平家物語

古今集 尾上八郎校訂

金槐集 齋藤茂吉校訂

好色一代男 西田萬鶴吉校訂作

好色一代女 西田萬鶴吉校訂作

西鶴織留 西田萬鶴吉校訂作

當世胸算用 西田萬鶴吉校訂作

日本永代藏 西田萬鶴吉校訂作

奥の細道 芭蕉伊藤松宇校訂作

嵯峨日記 芭蕉伊藤松宇校訂作

吉野紀行 芭蕉伊藤松宇校訂作

謠曲集 野上豊一郎編

上田敏詩抄 上田敏著

一口剣　幸田露伴著
風流佛　幸田露伴著
うたかたの記　森鷗外作
舞姫　森鷗外作
文使ひ　森鷗外作
ふた夜　森鷗外譯
埋木　森鷗外譯
樂園喪失（ミルトン）　藤井武譯
戰爭と平和（二）、（三）、（四）、　トルストイ作　米川正夫譯
オネーギン　プーシキン作　米川正夫譯

檢察官　ゴーゴリ作　米川正夫譯
ギルヘルム・マイスター（上卷）（下卷）　ゲーテ作　林久男譯
稻妻　ストリントベルク作　小宮豐隆譯
幽靈　ストリントベルク作　小宮豐隆譯
痴人の告白　ストリントベルク作　辻和、林共譯
愛と死との戲れ　ロマン・ロラン作　片山敏彦譯
エピクロスの園　アナトール・フランス作　林達夫譯
三人姉妹　チエーホフ作　米川正夫譯
傳說の時代　バルフインチ著　野上彌生子譯
ラム沙翁物語　野上彌生子譯

岩波